

矢籠梅 ひらがな盛衰記

三好松洛 作者 淩田可啓

竹田小出雲

○第壹

頃ごろの元暦元年正月廿日、朝日將軍木曾義仲惡逆日あさひしやうじんに盛なる都の騒動
玄げんづめよと、鎌倉殿の下知を請、大手の大將浦冠者範賴、勢田をさして攻
上のらる、搦手の大將よハ九郎こずは、曹子、義經伊勢路いせを越て上洛有「心ぞ剛がく」と
たくま玄げんし、附從ふぞう輩どぞがらよハ佐々木の四郎高綱、畠山の次郎重忠、和田の小
太郎義盛、侍大將ししやう川原平三景時、其勢二万五千餘騎甲の星ほしを戴いたゞきて夜晝、
分わかれぬ旅なれどいざむ驛路えきろの鈴鹿山すずか、去年のゆかりと消殘きへのこる、雪の戸とさし
の麓よもとの關せき八十瀬せにつゞく加太山、川かわを越て山路じゆぢゆよかしり、山さんを越れば
川瀬かわせよひたり、西にへくとなびく旗手はたてよ、東風とうふうが玄げんらする風の森もり、あけの

玉垣見へたるにいか成神が立ち幣敵追討を祈らんと暫く床几立させ
て皆と休らひ給ひける詠れバ、山より山の山道を、腰もふたへの老の柵、
柵を便とぼくと柵を傳ひて歩くる、大將見給ひあの柵めせと有ければ、
和田の義盛承り、やア老大將のめざるは、早く是へと招かれては、
つと計は老人の前間近く畏る、義經仰出さるは、山人なれば案内
がりつらん是より宇治へ出んは、近道有やと問給へば、心安事のむ尋
やば覽遊ばせ西より見へたる平岡を、あらた山とす夫々先より頭落の瀧
といふ所を行んは近道みてひと云もあへぬよいや老人戰場より
はんより頭落の瀧とい禁忌なり、又其外より道なきかさんい此社を弓
手へ廻り、笠置とかじつて通有よき道のひと、上れば義經重で此社
の神体いか成神ぞ、老人立ちすやとの給へば、いやしき身なれば、
委く存せ共、此神をいと明神とすて、文字より射手と書ひへ

共云安がならへせどや、いとゞの明神とすなりと語れば大將は悦喜有
いとゞの明神弓手へ廻り倍よかしつて攻よどゝ面白しく、それ老人
よ恩賞せよと仰もおもきに惠に褒美あまた給はりて、早に暇と老人へ、
宿所をさして歸りける、梶原平三すゝみ出いさましく、武士の運よ叶
ひ、弓矢神のほ前よ暫くも休らふ事偏よ神のほ加護なれば神前よて的
矢を射軍の勝負を試やすん見物あれ人よと鎧の引合せより陣扇取出し
幕串よしつかと結付、矢比よき場よ立させられど、有あふ人よ息をつめ勝
負いかよと待所よ、梶原一世の公業と滋藤の弓のまん中取廣言してぞ
罵たり、抑梶原が家よ傳わる譽といつば先祖鎌倉の權五郎景政、敵よ左
の眼を射られ、其矢もぬかす答の矢を射返し、唐日本よ名を上る、見給へ
殿原扇よ書し日の丸は、取も直さず朝日將軍木曾義仲、此景時が一矢よ
て、朝日の直中射返さんと鷺の羽のとがり矢打つがひきりくと引玄

ぱり暫しかためて切て放せば、何とか玄げん覗ひそれで大將の、白旗
横よぬふて止まつたり、なむ三寶と弓投捨、まじめくなればずハや味方
の大事ぞと眉をひそめぬ者ぞなき、大將義經聲高くやをれ梶原義經が
下知をも受す、鎌倉殿の出頭を鼻よかけでかし顔の采配立試の的を射
損じ、味方よ氣ふくれさせつるゝ言語道斷の曲者、夫戰場よ日の丸の扇
を用る事、淺く數も思ふべからず、日の丸は則、日輪、日の神の影を移す
陣扇敵間近く寄ならば、ばつとひらひて真甲よ指かざし神の威光を頭
よ戴此日よ敵對ふかくの武士、神の处罚よ亡す道理、今度の敵木曾義仲、
朝日將軍と名乗事、全此理よ相同じ、扇の的よ大諱の傳と云事有故實
を玄つたる武士、日の丸をよけて地紙を射か、蟹目際を射物よ、夫よ何
ぞや梶原が朝日の直中射通さんと神よ弓引冥罰よて却て味方の旗を
敗る旁以て不吉の相よし此上ハ義經が故實を正し一矢射て、軍の勝負

を様さんと、思ひたためたる弓の裏筈、神の告を白羽の矢取てつゝ立上
り、見よ扇へ西又有朝日へ東又有物を西又入日を追詰く、木曾が胸
板射通して八本のあべら骨ばらく、ふしてくれんと弦打つがひし拳
のかたまりよつびきひやうと放つ手答あやまたず蟹目射切の骨ばら
ばら、扇碎て飛ちるよぞ。今よ初ぬ義經の凡人ならぬ弓勢を恐れぬ者乙
そなかりけれ、大將の弓矢畠山の重忠受取恭しく神前又捧奉り敵
又打かつ拍手も味方の勝利疑なしと、は悦びに限りなし、耻を耻と思
ハぬ梶原、味方の旗を射通したるも弓矢の故實か二心か返答聞んとき
め付られ、面目なげよ頭を上、義經公へのヤ譯只今切腹仕る何もさらば
佐々木殿介錯頼存ると、鎧の上帶引ほしけば四郎聲かけ、鹿忽く、か
かる大事を拘ながら、腹切んとは同士打も同し事、但大將への面當か、今
度の軍又高名あらばナ譯ハ自然と立聊爾有など押えづめ、威儀を正し

て後前又向ひ、梶原が切腹某下預らん、又白旗を射ぬいたる凶事又あらず却て吉相君の後軍慮圖をはづさず、歎又はたと當るといふ瑞相めでたしくと秀句又寄て壽ば、義經後感斜ならず高綱いしくもやたり、ア梶原過て改る又憚ア以來を急度慎ベ玄と物又さはらぬ後詞、あつといへど義經又意趣を含し其根ざし此時アと玄られける斯て時刻も過行ば大將采配アつ取て、ア時移りなべ敵の要害悪かりなんと先よすんで打立給ふ、寛仁大度の後粧悠アとして勇有義有巍アたる巖石踏したき、宇治川アして和泉川威勢ア輝光明山平等院の北の邊富家の渡りへ着給ふ源氏の後代の末長く榮々アる時なれや、九重の空アも閑き、春の色霞アこめたる檜皮アき、美麗を盡し手を盡す、木曾殿の後館又いは長男ア駒若君三つの長生うるはしくわけて母君山吹後前、後寵愛淺からず付添女中も機嫌アを取、ア賑はふ其中又、お傍離れぬお氣又入おふでどい

ふて才發者しとやかよ手をつかへ此春の珍らしうお國よかひつて都
で年をふ重ね遊ばしに祝儀すも漸きのふけふ馬鞍休める隙もなく、
又軍の戰ひのと心よからぬ世の騒、おあんじも尤ながら四天王と呼れ
たる、一騎當千の人よ巴様も向へせ給へべ十が九つ味方の勝、お氣づ
かひ遊ばすな、妾たがなんぼ大力でも殿のお種を身又持て、切つはつ
りあぶな物、出物腫物處嫌はず、ひよつと其場でけが付たら、サア自も夫が
氣遣、殊更左孕と有バ疑ひもないほ男子、何事あう平産あらべ此駒若の
弟、今迄此子をかへゆがつて貰たかへり、自も心一ぱいしと妾ばかり
たい早々抱て見たいわいの、そりやしれた事、常さへどちらもお中が
よふて、お互ひだき合ごくら、お精次第根次第、中よ立た殿様もお嬉しか
らふと打笑ふ折から告る先走、只今殿様は歸館と呼へる聲よ家中のめ
ん、地又鼻付て畏る、叢蘭茂せんと欲すれ共秋風是を破るとかや朝

日將軍木曾義仲、てり輝ける物の具も龍よ翼を得る如き、威勢勇美の海
綱ひ志づくと入給へば、山吹に前出向ひ、是れく思ひの外早いお歸
り、そしてどふやらに顔持も勝れず、早ふ様子が聞ましたいさればく、
兼ては身も存知の通鎌倉の討手、範頼、義經夜を日よついで攻登れり、宇
治の手ハ楯の六郎根井の小彌太を指遣へし、勢田の手ハ今井の四郎兼
平又固させ。猶又巴も跡も打立どひいへ共折悪ふ頬口の次郎ハ多田藏
人行家を攻ん爲、河内國へ立越れり、味方ハ小勢敵の多勢よくらぶれり、
十分が一中より輒く防べき共覺ねば、某も今出陣し、士卒のかけ引軍配せ
んと思ふ付、は暇乞の爲院の所へ参りしよ、嚴門戸をさし固物音だ
よ聞へざれば、せひなくすゞく、歸つたり、ぞ、口惜や淺ま志や、過つる轟
永二年砥並篠原兩度の戰ひ、平家の大敵を切靡し勳功よつて朝日將
軍よ補せられ高名譽を顯へせしよ、今又平家よ從つて朝敵謀叛と呼る

るも、皆君の爲天下の爲心を碎くかいもなく、却て隔疎せられ剩鎌倉へ
追討の宣旨をくだし給へり、一門弓箭を合せ、同姓勝負を決する事偏よ
君の獻慮淺きよ似たれ共、普天の下卒土の内、王士よあらざる所なけれ
ば是逃もせひよ及へず、此上アマ片時も早くかけ向ひ、腕限カツリミ攻戰ひ潔よ
く討死せんと、思ひ切たるに顔色見るよ悲志き山吹に前、搦シラフひけふの出
陣アムニにとく々覺悟遊ばして、討死なされん爲なるかさほと科なきに身の
上時節アマヒツヅケを待てなせやひらきハラキなされぬぞ、心やすふ討死とお前ばつか
り合點アマタツキして、此駒若や巴様アマモトヨウの胎内タナカの、お子チいとしう思アマシされぬか、あんま
り氣づよいどうよくぞや、どうぞお心ひるがへし、お命恙アマガタなきやうの詔
了アマケン簡アマハラあい事アマコトかとすがり付て泣給アマシテへば、おろかく夫程アマヒツヅケの事辨アマハラシへぬ
義仲アマヨシよあらぬ共、所より中納言兼雅修理太夫親信アマシヨウを初め、百官百司
も大半平家アマヒタカよ心アマココロを寄れべ、中アマよアマひらく時節アマヒツヅケになし、分て多田アマタの藏人行アマヒトシ

家ハ某ニ意趣有中、義仲ニ木曾の山家ニ育たる不骨者、色ニ迷ひ酒ニ
超じ奢の餘り朝家を亂す謀叛人ト、讒者の口ニかけらるれば、逆もかく
ても遁ぬ運命、義仲が胸の鏡くもらぬ証據ニ天道ならで誰か玄らん、泥
中の蓮も汚ぬ花の榮を見ず、我惡名ニ後代ニ残し、身ニ戰場の土とキヘ
首ハ大路ニさらされて耻ニ重ん事返すべくも口惜し去ながら、我
ニ命を落す共ニ身は片時も館を立退駒若を養育シ、時至らば義仲が
罪なき旨を奏問シ、再び家名を雪れよ、ふびんや何のぐれんせなく、是今
生の別れ共、玄らずわからず我顔を見て餘念なき笑ひ顔いぢらしさよ
と計みて、勇氣ニ倦ぬ大將も、恩愛父子のうき別れ暫し涕にくれ給ふ、山
吹は前ニ今さらニとむる方も泣くづおれ、たつた今迄子の行末家の
榮へ、身の上、千年も添やう思ひし事もあだし世の夢か現か悲しそ
やと、身をもだへ伏況み聲もおしまぬさげび泣見るよ身ニしむお筆

が思ひ、お道理様やと諸共々、袖を玄ぼるぞ哀あるかゝる歎の扼こそ有、
間近く聞ゆる轡の音、亥やんく里んくさらくささつと吹きくる
春風と名ふあふ名馬又打乗てかけ立蹴立る馬煙生付たる大力又馬上
も勝れし巴前色をゆかりの紫ふどし鎧からげの女武者長刀かい込
鞭打立馳付門前ひらりとおり、拵も此度宇治の戦ひ、櫛根井が計ひよて
橋板を引岸又ハ垣楯川又ハ亂杭透間なく大綱小綱を流かくれべ、鷺鴨
などの水鳥も輒通るべし共見へざる所又、血氣の大將義經が下知よよ
つて佐々木、四郎高綱、梶原源太景季先陣二陣又川を渡せばちし足利
三浦の一黨我もくと打渡つて攻戰ひ、味方敗軍剩へ櫛根井も討死し、
士卒もちりト無念あがら引かへし直又追立勢田の手へ向ひんと存
せし所既ニ宇治の手破れ亥かバ勝又乘たる鎌倉勢或ニ木幡醍醐深草
月見の岡、思ひく打て馳こへ都へ亂れ入と聞ペ身の上氣づか

は志く立歸りひと云もあへぬよ人ゝはつと仰天鞠果暫し、詞もなかりける。木曾殿少しも動じ給はず。こそく、胸よこたへし味方の敗軍死べき時又死されば死又まさる恥多し、今こそ木曾がさいごの門出巴來れとの給へばつといへど伏しづむ、山吹は前お筆が歎見れば心も打志ほれ、君の先途を見届る、死出のお供の一思ひ跡又残りて便なき。身の上いか計悲しうなふて何とせふ、おいとしほやとかきくどき、志やくり上たる歎みづれ、木曾殿もやせきくる涙止め、兼させ給ひしが、心よはくて叶はじとふり切て馬引寄ゆらりと召ば、巴は前も泣目をはらひ、片手よ志つかと巒面取て引立いさみを付、コレヤ山吹様死をかろんずるは勇士の道軍のならひ、今我君戰場へ打立給ふといへ共、是又決して討死共定めがたきの時の運、此巴が付添からひ、歎何万騎有連も、我命のつゝかんだけ片端撫切拜打、くもでわちがひ十文字、十方八方

打立、追立まくり立せひ一方打破つてかけ通りいづくいか成奥山よも
隠れ遁て時節を待ほ本意とげさせやべし、先夫れ迄に若君諸共忘るべ
の方へは忍びと諫る詞みふふでも嬉しく、夫はちつ共氣遣有な、わたし
が古郷桂の里の爺親は源氏譜代の侍鎌田兵衛が弟同名隼人とナ者年
寄たれ共心は忘ぬ弓矢の家、は主人といひ親子の中命みかけてかくま
りん、夫こそ究竟偏よ頼む隨分は無事で山吹様、若君様もふおさらば、
お前も達者で殿様さらば、さらばさらばと行名残のこる思ひはてし
なき涕と供み延上り、見送り見返る恩愛いもせ主従の歎みなづみ行兼
る駒の足取諸手綱引わかれ行雲のあし、雪吹交りの朝霞ひらの高根の、
さへ返り、春めきながら野も山も、雪ふまがへて白旗の、やゑ立敵の其中
を心細くも巴は前、はさいごの供はじと夫也又主命の、我身よ重き
唐錦古郷へ歸る鎧の袖、供をも具せず只一騎、名殘涕の玉くしげ、手枕ふ

かしねくたれ髪、夕べの儘、ふり亂し、鳥帽子引立眉ふかく見る目もく
もる鏡山、女共見へつ又男共、いか物作りの太刀はいて思切共女氣の跡
へくと心引琵琶の海面弓手み見なし、行先いかみ白月毛駒よ任せて
行道の手綱よ二世の別れの鞭打み、力ぞなかりける、俄よ越方さへがし
く、ナアあの凱歌ハ敵か味方か、君へいかよ、兄へいかよと覽束な人の便を
松かげよ馬乗としめ立たる所へ、勝誇たる鎌倉勢二三十落武者返せと
呼はつて追取卷、何落武者とい舌ながし、落ぬか落るか是見よと駒の頭
を立直し、うづまく我名の巴のごとく、右左よ乘廻し、蹴立踏立かけさす
暫しくと呼はつて、歩武者一人、軍兵よ先ち大音上木曾殿の内よ男
勝りの去者有と音よ聞巴後前と見しゝ眇目か、坂東一の勇者と呼れし
秩父の重忠見參せんと、いふと早く鎧の草摺志つかと取引おろさんと

ゑいと引巴よつと打笑ひ男勝りと名を立られ強身を見するは耻かし
けれど秩父程の人がらで坂東一の勇者呼はり聞よくいあらば手がら
よ引おろして見さんせと鎧の鳩胸踏そらし引よちつ共動べこそ鞍づ
よスこたへしれつくり付たるごとくみて廣言放し重忠も大力の女持
餘し馬人ぐるめよこりや／＼雪間を分て生出る春よ栗津の草ぞめ
いわく踏ちらし引戻ゑては引づられひいつ引れつよるべなき堅田の
浦の釣小舟浪よもまるしごとくみてこたへもこたへ引も引草摺三間
引ちぎり尻居よどうと伏たるひよがくしくもめざまし跡よ續し
佐々木四郎手柄ひ亥がちに免ひへ秩父殿佐々木が組で見せゆさんと
かけ寄ペのふくねつたい佐々木殿こはざれなせられそと押隔宇治
川の先陣へせられしが巴女よひいかなく秩父も叶はぬ今のかけき
まを見られしかず女秩父よ尻餅つかせたを手柄よして木曾へ成共ど

こへ成共勝手次第又早歸れ、と見られよ。歸れといふよ耳へも入ず鎧づ
きしてすはといひや、勝負せんと待大強者勝てからが女也、秩父が様又
尻餅ついて物笑ひ仕出すか、先此陣引たがよい、合點かくと目でゑ
らせば、夫ゝ勇者の尻餅と高名の首帳も、筆末ならば付ぬがよい、いか
みも此陣引が勝のふちしぶ殿、なふ高綱殿と黙頭合、よそよ饗立歸る弓
矢の情ぞ類なき後陣又扣へし内田三郎、アちしぶ殿佐々木殿敵又あふ
て勝負せぬ後を見するか二心か、内田三郎家吉参りそふと諸鎧かけ
合せ、天晴の器量武者ぶりや、ゑぼしが下の亂髪象でハなけれど此鼻が
繫りナ一軍して、内田が手並を見せずさん鎧の上帶下紐も打とけよ、引
手よ靡どミやれ事し透を見て組留んと、乘廻す巴が乗たる駿足は數度
の軍又あふ坂の、關吹こへて名よ高き春風といふ名馬、内田が乗たる韋
馱天栗毛足疾鬼迎足早き、鬼又ふどらぬ足どりは、兩方ふどらぬ馬上の

達者、駒の足並飛鳥のかけり、行違ひ様内田、三郎鑑の袖を引違へ巴よも
づとひつ組だり、間大膽な義仲といふ主有女も抱付て、こそば、目顔を
赤めて強い顔なされても、力の有体でもなし、聞へたく、女共や思ふて
ふか左禮か、人又こそ寄せ此巴より麻殻でつく釣鐘ならぬ事く、未來
の爲の折檻と前輪よりぐつと引付てうん共ぐつ共云さべこそ、片手もす
かうべ引摺太首ちよいと引抜しれ、子供遊びの紙雛の首を抜より安か
りけり、和田ノ義盛是も有、聞しう勝る女の働くながら、手柄も人よる物
と、生る手比の並木の松ぐつと根ごしも引抜て、馬人共も一打と口より
いへど心より、馬の諸脚なぎ倒し、遁手取よせん物と、追様向ふ横腹へ、な
ぎ立るを事共せず、巴の馬を乗飛し、熊の子渡し燕のもじり獅子の洞入
などといふ手綱の秘密よ聲そへて四足を土よ付べこそ、宙をかけら
し地をくわらし踏みかけんと透を待暫しあしらふ、折こそ有敵の方よ

聲立て、朝日將軍義仲を石田、次郎が討取たり、今井四郎兼平も一所よさ
いと呼ひる聲聞よ驚たるみを見て、義盛名たりやかしこと、馬の前
脚どふとなぐながれて、前脚折よと見へし、巴も馬上を眞倒落るを其儘、
おこしも立ず、家の子郎等ふり重りかくる千筋の誠も、妹背を結ふ縁の
綱ながき夫婦の初どハ後又ぞ思ひ忘られける、斯と注進忘てければ、
大將義經公ちしふ佐々木を召ぐして泥障を土手より敷かいや御座より移
らせ給ひける、和田、義盛罷出、女を生捕手がらがましくや上るも、おこが
ましくいへ共鎌倉の前よはさたひひえ、木曾殿の妻、巴と女召捕
てし、いかゞ計ひやさんとや上ればいしくも忘たんなれ、直より問べき子
細有早いそふれど、銛みて、引出す繩取共返つて、宙より引立て、をめす脣
せず、大將の膝近く、ふりあをぬいたるかんばせよ、はらくかゝる無
心の涙雪よ霰ぞ乱れける折しも梶原平三景時、武者一人召具し、息を切

てかけ付當手の怨敵おんてきの悉討こととく亡まわし鬼神きじんと呼よれし朝日將軍義仲あさひのしやうぐんよしゆかを石田いはだ爲ため久ひさが討取うちとり首くびをほ目め又かけくれよと某それがしを頼たのむ其身そのみの後陣ごちん又罷在まつりあり又召連めしゆんし此おとこ男おとこ井上次郎いのうじやうらと申本曾もともとの郎等らわら主ぬしの恩逆おんぎゃくを疎うそろ今井いのう四郎よしやう兼平けんぺいが首くび取とりて鎌倉殿かまくらどのへ降參おこうさんの手て土產候みやげと直垂ひたたれの袖そで包つつみたる甲首かぶと太刀たて貫くわたる今井いのうが首くび實檢じつけん又備そなへゆれば、三さん我殿わがどか兄上あがねかと巴ともの繩取引立つなとりひき立ててかひり果とげたる姿すがたや覺悟かくごの上うへ云いながら思おもへば、曉あかつきの鶏けい又互たがひの泣別なきわかれれ、ながい別わかれ又成あつたかと、二ふたの首くび又身みを寄よせて、人ひとめも恥はずどうと伏ふ聲こゑも惜おもず泣なきれたる梶原かじはらいかつて、やめろやめろと今又成あつて何なんのはへざま、尾籠びらう成なりと引立ひきださせ恐おそれながら首くび實檢じつけんなされ、井上次郎いのうじやうら又も褒美ほびの詞ことば下ささるべしと取持とりもてべ、つくぐつくぐと實檢じつけん有あ、淺あさましや、同じ清和せいわの臺だいを出で正ただしき源氏げんじの累葉るいえとして、平家ひらけに勝まさつたる朝敵謀叛あさひきわせんの族やからと成なて、末代源氏すゑだいげんじの弓矢ゆみを汚けがす一門いつもんの面おもてよごし、憎にくやくと持もたる扇おきふり上あて丁とと打う給たま

べば巴からへず、聞えくし義經殿、平家と勝る謀叛人との何が謀叛其譯
聞んと詰かくれば、いふ迄もなし、法就寺の御所を焼討し高位高官の
人を苦めし、是が謀叛朝敵で有まいかと以ての外の御氣色、巴涙をは
らくと流し、されば夫こそ木曾殿の深き思案、謀叛でない物語、並る
る人とも聞てたべ、既に木曾殿礪並俱利迦羅篠原の合戦と打勝都へ攻
登給ふと聞へしかば、平家一門の人より三種の神器を守奉り、西國へ落
下する、木曾殿都入かりつては所を守護し給へば、法皇は感斜ならず、雲の
末海の果迄も追詰、平家を討亡し、三種の神器を事故なく、都へうつし參
らせよとの宣旨、畏てお請やさせ給へ共安からぬ一大事、三種の神器
を取かへさんと直攻み攻るならば、身の置所ない儘よ唐高麗へも逃渡
らば、勿体なや神器傳ひる三種の寶、ながく異國の物とならん、日の
本の國の耻、若又海底も沈め失へ世の常闇とやせんかくやとは思案

有義仲朝敵謀叛人の名を取び、平家心敷して一致せん必定折を覗ひ
三種の神器を奪取跡で平家へ麿。此上の分別なしと心え工ぬ惡逆
の謀。夫とは玄らで諸國のかり武士共我儘を動しハ木曾殿の玄ろし召
れぬ事ながら、まんまと上うの朝敵の名を取給ひス、鎌倉の討手向ふと
聞へしかば、寄られてハ後手よ成、身よ誤りなき由を下分させ給へど
いへば、いやとよ他人よリ一門は猶恥有宰我子貢が辨舌をもつて云は
どく共三種の神器を取かへし平家を悉く討亡さねば我本心ハ顯られ
ず、比興げよ言譯ハすまじいぞ、かく成果る我武運寄手を引受潔く討死
せんと覺悟なされ、夫故えこそやみくと、今度の負軍ナ詞ニ疑ひあ
らば仰置れし詞の末召れし甲よ子細ぞあらんに覽有、いかよ思し明ら
めても、心の内の口惜さいいか計、人こそ多けれ石田づれの名もなき
下郎の刃よからり勿躰なやほ首ニ義經が扇を受、一かたならぬ冥途の

は無念、あれ此身が儘ならば、義經殿、飛かしつて恨いへん物、口惜や
悲しやと立て見居て見身もだへし、こぼるゝ涙を押へんとすれ共繩の
強ければ、頭を膝みすりあてし前後、ふかくよ泣るたる、高綱仰おほせらうせなまを承へり
は首おの立寄て、甲かよどを取バ鉢受の絹きぬみ卷添し一通有取出し捧ぐればつく
トは覽じ仰天有あがめ是見よ旁巴かたばがナナみちつ共達おなじ、三種の神器を取か
へさん爲の計畧思ひ設おもね朝獻あさげ成たる悔くやみの條じょう、神明佛陀ぶつだを誓ちかひみかけ
逐おち一書殘かきのこされたり、扱あそハ反逆ほんぎやくわよてへなかりしあ、鎌倉殿こそは心付す
共討手うちてを蒙る此義經、尾張三河の間あいだ又軍兵ぐんべいをとゞめ置おき、一應おおらも再應さいおうも使
を以て事の品どひを問おと明らかめ、反逆謀叛ほんぎやくはん極きわまらば其後こそ討べきよ、其氣の
付つかざる我無調法扇てうぱうさふぎを以て首くびを汚けがせし我誤あやまつに詫わび申まことしてたべと座ざを立
て義仲の首取上あがめ、義經が名ない玄くわんやな王丸、貴殿きでんの名な駒王丸、鞍馬くらまと木曾きのさ
の住所あかられ共いな再び源氏げんじの世よにあさんと、耻はを凌しのうきめを見し心遣こころ

ひれ一ツみて平家を西海へぼつ下せし源氏再興の軍初の大功の貴殿
こそ立られし其功を空しく謀反人の惡名を取て果給ひしさいごの遺
恨をひるがへし弓矢擁護の神と成源氏の武運を添給へと押戴くひ
たんの涙よりくれ給へば伺公の武士を初としてかけ構なき下部迄かん
るい催す計なり和田も哀よかきくれてゐたりしがは前より向ひて道源
氏の血筋逆驚入たる木曾殿の心底然れば此女より掛るべきに疑も
科もなし殊より木曾殿の胤を懷孕せしと傳へ聞義盛給ひつてゑさい
よ具せんと申すいかゝ合筵は踏む共に子誕生有迄り我等より預下さ
るべしと云せも立す梶原平三心得ぬ義盛の願ひどふ書て有ふがど
ふ云ふが皆嘘く謀叛人より極つた木曾義仲其胤を孕だ女の預子を産せ
て何よりせらる但其子を守立て又謀叛おこす氣か夫ともけふも鎌
倉殿の計ひ先差當る拙者が取次の井上次郎兼平が首取たる莫太の

高名、は褒美のひ詞下さるべしと遮て言上すれば秩父の重忠、イヤ梶原殿、義經公の惣軍のひ大將、細成事の玄ろし召す、今井四郎兼平の目下、木曾殿討れ給ひぬと呼へる聲を聞しより、太刀をくへへつゝ逆様も落て貢かれ死たる事誰玄らぬ者もなし、夫を何ぞや井上次郎が高名とい死首取たるが高名か頼まれての取持か、自分の最負かよし夫とも有重恩の主の討死を、余所も見捨命おしさの降參僞をかざる表裏の武士、取次の梶原殿迄心底疑ひし返答あらば承へらんと一口もやり込まれば、井上次郎進出あさく數重忠の仰主人の討死を見て降參する様な井上、えてい候ひず、一兩年以前お梶原殿を頼、頼朝公へ心を寄、義仲の身の上、嘯一ツ仕れた迄、大も成て告知し某是計でも捨ても一ヶ國や二ヶ國が物の有、其上も又兼平が首取たるけふの手柄、浦山玄うてのわんさんあらん、此首邊もおまするぞ、勳功解狀も預られよと首取て投出せば、事

を破らぬ重忠もこらへるよこらへ兼儕等如きを手よかくるい、おとあ
げなしと思へ共弓箭をけがす人非人、みぢんみなさんと飛かしる義經
暫しと制し給ひ、井上次郎が忠節の此度初ならず、梶原平三が取次を以
て、兼て鎌倉殿へ歸伏せしとや上の万事鎌倉よて、鎌倉殿のに裁許有べ
し、夫迄互の論へ無益心得たるか、義盛の願ひの儘巴を汝よ預るぞ去な
がら、平産の子男子あらば朝廷の恩、義仲の名を包汝が子とし和田の家
を相續すべし、巴が誠とくくと揃らるゝに義經の情の詞計よて繩も
とかしる氣もとくる朝日將軍義仲の名を象りて生子を朝比奈三郎、義
秀と古今より秀し兵の此胎内の子也けり、いざや人と都よ入て勝軍の儀
奏問せん、せひもなき浮世のならひ、義仲の首今井が首土中よ埋跡吊
ばやと思へ共院のに氣色はかりがたし、けびいしの手よ渡さでに叶ふ
まじと、秩父佐々木よ取持せ道を早めて走井の軍の備へ九重の都よ踏

をとばせらる、梶原井上手持なく顔見合せ、梶原殿、義經と云ちしふといひ、大抵でいかまれぬ相手、鎌倉殿もあれなればいかふ充のちがふ事と、ぶつつけば何さく、義經が爰での我儘、鳥あい里の蝙蝠追付鎌倉殿のほ前見せ付る所で見せ付る、といつらも覺て居よと睨廻し、次郎を引具し立出れべ、巴すつくと立上り待たく、井上次郎君は存命の内とも鎌倉へ内通とへたつた今聞たいかゐか世話で有たの夫へいふてせんない恨、指當る兄の敵主君の怨もふ臨終よ間りない、旦那寺へ人やらんせど、曲流詞も井上が頭の上よ雷の落かしるかとすさま亥く、ち梶原殿弓矢取身の相互、今の命をお助と脚腰立す身もわなく、頼人より頼まるゝ梶原も底きみ悪く、人づかいがなくべ、旦那寺へ身がいかふと云捨てかけ出せば、續て遡る井上が綿がみ、擱で引戻され、扱ひ道が違たそふな、どちらへいても大事あいと遡出す、先よハ和田が仁王立左り義

盛右巴、一ツ巴よくるくとぢり——廻する井上次郎、命お助くと土
ム鱈臥手を合せ。泣る外の事ぞなき、ふがいなき業さらし、主君の怨兄
の敵又ハ不足ながらと引よせて、首ねぢ切んとせし所へ、井上ガ郎等共
主の命を助けんと、一度又拔つれ切てかゝる、志ほらしやほしがる主
をゑさせんと鎧の上帶かい擗落花みぢん又投ちらしむらがりかゝる
を引よせく、せめてハ是で色直し返付和田と祝言の印、今打人碟、身が
るき勧蝶花形出合た敵ハ三ゝ九度むらばつと遡ちつたり猶も進
むを引とやめさのみ長追長柄の鏃子かへせ戻せハ無益ぞといさめる
駒又小角を入時又近江の鮒盛や乘、玄づめたる義盛が二葉のひれ又相
生の、松の榮やゑいこのくくく、此壽をよう昆布、敵又勝栗のつし鬪
斗つれて、陣所へ歸りける

鷹の水又入て藝あく、鶴の山又有て能あし筋目有侍も世事又ハ疎き町
住居削る楊枝さへ細望性、左んく黒もじ身すき楊枝商賣磨やうじの看
板猿もくねど高楊枝浪人とこそえられたれ此家の家主門口から暮
迄精の出るハ急な説物でござるか、ヨリヤふ家主様けふハ何事がふこつて
やらちよこくお出、聞へた晦日前ありや家賃の催促私も油斷ハ致
ばぬ此楊枝仕立て先へやれば、其價で家賃ハ野々山跡の月の残りも受
取次第上ませう、いや催促計よくてもおじやらぬ、楊枝計削てハ埒の
明ぬ身代、取付から知てゐるなじみのそなたばかの行ぬ世話が笑止さ
よ思ひ付た事も有、咄して見たさ來事ハきてても以前が侍、鹿相な事ハ云
出されぬ、是ハくは遠慮迷惑、は懇意の上お咄とハ先耳寄、早々聞たら
存ます、其氣なら咄しませう、浪人殿又ハよい娘持れて、木曾殿へ奉公
矣やと聞いてゐる此間の騒動、木曾殿も死めしたりやお娘ハ浪人あら興

身代^{ひとな}よ口^{くち}がふへて、彌^やいくまい幸^{さち}とおれが玄^{くつ}た大金持器量^{おほがねもちきりりょう}のよひ
おてかをほしがる、捨金^{すてがね}の甘兩^{あぐら}や卅兩^{さんらう}に此家主^{このけしゆ}が受合^{うけあひ}あぶなげもなふ
家賃^{じんぜん}も取^とる、重一打出^{だうぢゆつ}した仕合^{しあわせ}ときて見るも充^{あつ}が有^{あつ}、夕べ八つ過爰^{すきこゑ}な表
を頻^{しき}々^{たゞ}叩^{たた}き、其跡^{のあと}内へはいり咄^{とつ}し玄^{くつ}たり女の聲^{こゑ}と相借^{あひ}やの者が玄^{くつ}
したで扱^{あつか}ひふ娘^{むすめ}と來^きて見れば、いつもかゝらぬ古長持^{ふるちがさ}と古親^{ふるぢに}仁^{じに}破屏風^{はくびやう}
かけべつい鍋洗^{なべあらい}ふて待^{まつ}てゐる、又戻^{もど}らぬの、お存知^{ぞんじ}の上^{うへ}隠^{かく}すと及ぬ、
成程^{せいせい}奉公致^{むか}させ置^{おき}た木曾殿^{きそどの}の没落^{ぼつらく}、付娘^{つけむすめ}が事案^{ことあん}じぬでもござらぬ、去
ながら軍^{ぐん}の法^{ほう}で女子^{じよ}の指^指もさしぬ由^ゆ、又差^{さず}やつが有^{あつ}てもさしれてゐ
る様^{よう}などんなやつでもござらぬ、親^{おやぢ}の内^{うち}に忘^{わす}れて有^{あつ}此桂^{かつら}の里^{さと}、遲^{おそ}いか早^{はや}
いか戻^{もど}りませう、夕べ門^{たん}を叩^{たた}ひ夜通^{よど}參^{さん}りの愛岩^{あいわ}の下向^{かか}、又隣^{となり}の兩^{りょう}がへ
店^{みせ}と取^と違^{ちが}へ、こちの戸^とをわれる程^{ほど}叩^{たた}く、何^{なん}やと表明^{あらわ}されば、錢^{せん}がほしい
といふた故^{ゆゑ}、おれもほしいと云^いかへし笑^{わら}ふて仕廻^{しわく}たといひけれど、夫^{おとこ}

で聞へた談合の娘の顔見てから、手と取ぬ咄し充満して爲業後て家賃待てといふまいぞ、咄す内日も暮た店の仕廻手傳ひふ夫のお慮外慮外玄やふ玄やらぬ、一人玄てぐれたひしすとや、店が損て家主のめいわく、此猿めが守玄かるで賣ぬ楊枝もこいつも内へ取る上店下店上て、そこで鎧門の戸玄めて、家賃の夜なべ精出そぞや、合點でござりますお娘の事もサ合點ようお出なされました家賃も娘も來次第よこちからほ左近致しませう、お出より及ぬと門送玄て家主が、内へはいるを能見届立歸つて玄むる門の戸の、日破ふし穴釘穴々、若も覗人もやと建立かけ古門幌店の道具で取繕、是で覗氣遣ひない喫氣詰りほ究屈と長持のふた明ればいたじや山吹ほ前駒若君を抱參らせお筆諸共出給へば引さがつて頭をさげ、移りかへる世のならひとつやながら、朝日將軍のほ臺若君かしる生垣よ隠れ忍び日かけもさしぬ櫃の中、若君の

長じう出たい共おつまやれずむづかりもなされず、ようは堪忍遊べし
たふ氣晴しよ、何ぞお慰あきらめ、夫よ店守の此猿、まめなみあやかりおへし
ませ、まさるめでたいほ壽命と祝ひて指出せば、いたいけ顔のよこや
かみ猿の頭かみあざをたゞいつ撫なでつ、ゆきげんよげみ見へければ山吹やまぶきの前のほ
悦えび、何から禮れいをいへふやら譜代ふだいでもない主従しゅしゆうお筆ふでと連つれて親おやぢ迄までか
あせわあせわ成まする、義仲様よしのぶさまはさいごと聞きとも同じ道みちと思おもひしが遺言ゆいごん
も有此若わがわいを捨てすても死しれぬ身みのつらさ思おもひやつてと計はかりみて跡あといつきせ
ぬほ涙なみだ勿うな肺はいない私わたくしがどと様ようと何なんほ禮れい、娘むすめよふいふた元來もと某そのも源氏げんじ
の譜代ふだい野間のまの内海うちみよて相果あひはてし、鎌田かまた兵衛政清ひょうせいが弟おとうご鎌田隼人はやと清次きよつぐと申しの者し
子細しき有て兄政清きょうまさきが不興ふこうを受うけ義朝卿ぎじょうきょうのほ先途せんとも見届みとす、本意ほんねを失うしなふ瘦浪やせうな
人ひと、古主こしゆの源氏げんじへ歸參きさんの望のぞみ、二人有我娘わがむすめあるわ姉ねいのお筆ふでをほ前まへへ指さ上あ千鳥ちよとい
ふ妹めいを鎌倉かまくらへ遣しらつし出頭しりつの梶原家かじはらけへ奉公まつこうする、歸參きさんの便たよりと存そんせし所ところ

ま、思ひも寄ぬ源氏と源氏の臣軍指當る姉がは主人見捨て出世の望み致さぬ、年こそ寄たれ心一ぱいお力又成やすん。夫又付木曾殿の臣内又四天王の隨一と呼れし樋口次郎兼光討死とのさたもあり存命であるならばみだい若君引受て世話を致すべき樋口が安否お聞及びなされずや、さればいの樋口次郎ハ多田藏人を攻ん逆河内の城へ向ひしが其後ハいなせも聞ず世よつれる人心頼ム思ひし樋口又はへ見捨てられたる親子の者自が身の厭何とぞ若をもり育二度世よもあらせて下され頼ハ隼人一人ぞと又泣ゑづむはふせい、お筆親子も諸共又、ゑぼり兼たる袖袂、げよや至て悲しきよい腸を斷といふ、猿の楊枝や曲者ぞと、樋原が郎等番場忠太家主又案内させ、聞耳立る表ハひそく、内よは忍ふない玄やくり扱こそ知たと打黙き、門の戸あらく打たしく隼人驚是れ又家主はいらせてハ事やかましと、欠交りの聲玄ハふき、うまうねてゆ

る所を誰玄やいの用が有ならあしたござれど、ねぎめの躰もてなせ
べいやおれ玄や家主玄や、其家主合點玄や、夜夜半迄家賃の催促、夜が
明次第謎の楊枝先へ渡し、錢受取て急度濟す、起るのが大さうなあすの
事と云つゝそつそと指足して、戸口の透間を窺見れば、表と捕手のあ
ら者共すゞ打入ん吃相也、なむ三寶の大勢外、落する道もなし、とやせ
んかくやと胸も心も碎る計り、門の戸猶も打たしく、夫よ／＼よき思
案と娘が耳み口指寄、若君のお小袖を、ごりやかふしてな、其道はかう／＼
と、志らすれば打黙き、破屏風引立て、若君みだい諸共、身拘へする其中
又隼人の戸を明お家主、何事でござりますとぬつと出れば、それとかけ
聲番場が家來、十手ふり上おつ取卷、これ／＼聊示なされなヤン聊示
とのふといやつ、木曾が女房小悴かくまふたよ紛なく、主人梶原の下
知を受番場忠太が捕えきた、尋常よ渡せばよし、さあくべぶつてぶちす

ゆる、コレ浪人殿もふ叶ひぬ、かくまふた子をあなたへ渡せば、褒美を下さる、いちばらるゝと楊枝の様あ其腕が背中へ廻つて青細引、家主の過怠みそなたの飯を運にやあらぬ、家賃取ぬ其上よりふ成てハ家主めつきやく、サア早ふ渡されいと、歯の根も合ぬ震ひ聲、いや家主のなんぎよ指當つて此身が可愛、若君を渡しましよ、迎もの事にかうあされて下されぬか、かうとい細言、願ひあらば早まき出せ、物でござります、假初とも娘が主人、取て出してハ此頬が世間へ出されぬ、私も立何も立、了簡ハ何かなし、爰より置れぬ、出て行と追出します、皆ハ表より隠れてござつて此内を出る所、彼若君を引たくつて、女よりお構ひ有まい、すりや娘も助かるど、こもかしこもよい様、御了簡頬入と手をつけば忠太黙き夫程の義ハ宥免をしてくれう、かくまふた者共、早う出せ、家來共ハ挑燈かた寄物音す、あと其身も小かけ又立忍、隼人の悦び内より入又叫いて

親子が談合わざと表へ開する太聲、娘、親を充々思ふても吟味が強い。
背中より腹へかへられぬ、主人の供玄てとつとしらせふ、とし様そりや
聞へぬ他人でも義理へある、娘の主人を出て行といどうよくな事計と
聲より泣と目より泣ぬ親子が狂言、表よりすり出をるかと待受る、番場忠
太が腕まくり、内より隼人か、心付笠取てやり杖渡し、あんほ吼ても叶ひ
ぬく、出ていきあれといふてハ旅の用意のゆたん渡してハセうせい
といふてハきせるたばこ迄残る方なく取持せ、あれく、玄ふとい吼づ
らと、一人を門へつき出せバ待よ待たる番場忠太、山吹御前を引とらへ
こいつれ手ぶり次のめらうが抱ておる、此憤めとかいつかむ、この情な
や渡さじとあらそふお筆が手をもぎはなし、若君を奪ひ取償も供ふと
いふ聲みのふ恐ろしやお助有と、山吹は前のほ手を取こけつまろびつ
落て行、やれく、嬉しや家主みなんざもかしらす、お手み入ておめでた

い、ちつぽけあ形をして結構あるといふよ番場も心付、こいつ
ごねたか、玄やちばり返つて木ほせの様あ小悴せがれと桃燈取寄とつくと見、
駒若こまわか玄やないこりや猿松さるまつ見せざらしで耻さらしたよつくい浪人なにわ、
んごんでぶち殺せと一度みどし込門口の小脇わきよ隼人はやと隠れて、捕人つかひ
をやりこし入かり、すつと出て表の戸、外を引立かひだ鎧手よろ早くゑび鎧ちやうふろ
す、内うちより傳手てんてよ疊たてみを上すのこの下から長持ながぢの底迄たしけどこりやからぬ、ぬけ道ぬけぢなし、そ抜ぬき門へと引かへす、表の戸口とぐちの外ほかから立切、忠太
主しゆじゆう、家主けしゆま玄り、くわとふ玄やくと、うろくうろたへ爰明あいめいよと、内うちから
たゞく門の戸の外ほかよ隼人はやとが心地こころよく、くわ家主けしゆ家賃けんせがむがめんとさよ
家いえを明て今行ゆど、楊枝ようじやが猿さるぢゑの僻等ひきとうよ置おきみやげ、若君わかみの爰あいよ抱いだてる
ると、内うち懷いだこりふ顔がほを出し、御運うんつよきよこやか顔がほ見せたけれ共ともあらぬ、
ゆるりとそこみけつかれど、山吹さんぶ御前ごぜんの御跡ごあと玄くわたひいつさんおちよ落おちて行ゆく、

斐め遁すなど、番場主從聲々よ門の戸ふちわり店ふみ碎きいづく迄
もと追かくる跡より家主口あんぐり、ヨリヤさしぼうさみ玄かつたな、家に
碎かれ家賃へ取ず、儘よ百貫のかたよ猿一疋こいつめよ着物させ、爰
をさるとひ秀句玄やのさる迎へよふ玄かつたさるてんごうとの思ひ
れぬ、儕楊枝やめ力こぶ楊枝出さべ出せ、家賃をとらで置べきかと、跡を
玄たふて急ぎ行げよ武士のならびとて夫の跡の軍場よつまゝ東の留
主住居、梶原平三景時が屋敷より嫡子源太景季が誕生日の祝ひ迎、上段
の床よ兜鎧をかざり立敵よかちんの備へ物、御神酒の三方熨斗昆布、取
取運々其中よ千鳥といふに鎌田隼人清次が乙娘親の出世の便よと望
有身の宦友朋輩よも憎まれぬ、顔容より心迄愛敬有てかいいらしやく奥、
様の云付の通、お備物も残らず揃ふた、此障子をかう玄やんと立切とも
ふ仕廻、嬉しやど云けれど、そなたれ取分嬉しい筈、何がな御用聞た

がりやる若旦那の誕生日都の軍も勝亥やげな、どうかからかとお案じ
なされた母御様より、百倍心がいそ／＼千鳥殿、此お館又奉公する
身嬉しいばかりの有證據云ま志よ、若旦那のお立の時、
長い別れみならぬ様みめでたう凱陣遊ばし、お顔見せて下さんせと涙
かたてゝ抱付やつたを見てゐるゝ、隠すが憎い揃て白状さ志よと立か
かれべのふ誤つたこらへて下され、心安い朋輩中隠したゝん譯が有、よ
い事又す善尺魔と、弟の平次景高様、此千鳥又惚た廻くどかるゝ其
つらさ、わたしひ兄の源太様とそふもいられぬ日比の氣質、こんな
けびらい聞すがいなやたまらぬゝ、かんまへてさたなしと咄の中
の間の襖そつと押明病の床立出る梶原平次景高一重帶又大脇差伊
達紙子の大廣袖を打かけ、アあたやかましいめろさいめら、母人の仰り
せないで何をほざく、奥へうせふときめ付られあいと一度又立て行く

千鳥、そち計ハこしよ居リい、いや私もお袋様の傍ハへと云てはづそふ
てなそりやならぬ、願ふてもない上首尾シモヒテ、サアこいねまへと手ハ取ハべ下り
はなし、お前よりハ病氣故ハ、親様のお供ハもなされずおるすム殘ハつては
養生ハの最中ハ、夫マアおねまへとハ、お傍ハ又居リるさへわたしハこりいハ、病
人ハ不粹ハ、藥吞ハ假ハ令ハの見せかけ、鼻ハも引ハぬ達者ハな平次、ハンすハや煩
ひれなされぬかハうそ玄ハや、そりやあせハみ、なせハみハよそくハ亥ハいそ
ちをおれが手ハよいれうで邪魔ハなわル達京ハへ登ハし、うまいるす事ハせうで
な、佐兵衛ハ出かけた心中男ハ君ハよ憎ハふハ有ハまいがなハ、夫程迄ハわたしが
事思召ハて下ハりますハ添ハいと言ハれぬハ、京ハよ居リられますハとム様ハ、鎌田
隼人清次ハと申ハて、源氏譜代ハの家來筋ハ、頼朝様ハへ歸參ハの望御出頭ハの此ハお家
は奉公致ハしますハも、折ハもあらば右ハの願申上ハたい下心ハ、お袋様の赦ハしも
ないハ、お前の仰ハみ隨ハへば、いたづら者ハとお隙ハの出ハるハ定ハの物ハ、さすれば

親の望も叶はず爰をよふ聞分て、ヤアだまれ千鳥敷しが出ねば隨ひれぬ
といふ者が、兄源太といなせねたいやわたしり、いやどひどこへたつた
今儕が口から、よい事よりす善尺魔と、ぬかさぬ先から知てりるれど言
出しての物がない、ハテ儕さへおうといや、兄のわけてもいたゞく合點、か
ふ底を打わるからいいやどり言さぬ、手も足も引くしつてむりやり
抱てねる、ア應といふかいやといふてくしらるしかどうぞやトと肩
口とらへ手詰み成て動さねば、コレ無肺な事なさると平次様の病の嘘
作病でござりますと大きな聲で言ますぞへ、夫いふてたまる物か、いふ
なならこゝ放して放しての懸が叶ぬ、そんあぢや言ます、いや云さぬ
と口より手をあてせり合所へ、都々急用有て横須賀軍内、只今下着と打通
れべ、平次胸り、邪魔な所へと、うろ付隙をそつと抜千鳥の奥へ逃て行、
景高居直り、軍内急用とい氣づかわし様子いかみと尋ねれば、さんほ

は惣領の源太殿、鎌倉へは返しなさるゝ其義又付て、奥様へ親且那をは
内意の此み箱、先へ參つてお渡しやせ、畏つたと急の道中、川の水又隙
取て漸く只今、源太殿も追付ふ着、何次や兄貴が戻るゝ夫でにこつちの
工面がちがふ、何角又付てめんどいわろ、何の爲又歸さるゝそちや次ら
ぬか成程知ておりまする、其様子の前のは果報、今度宇治川の先陣、佐
佐木四郎又高名せられ、源太殿の後を取京中の物笑ひ、何が手ひどい親
且那は機嫌さんぐ、京で殺せば耻の上塗鎌倉で腹切せ汝をやるゝ撫
使同前必手ぬるく致すなどきつと仰付られた、惣領殿を仕廻ふてやれ
ば、佐家督の指誥お前めでたふゝ思さぬか、めでたいゝ、結構亦吉左右
能えらせた、悉い事の奥で聞ふ、先其名箱を母人へと打連てこそ入受け
る時もわらせず表の方、若旦那のは歸國とざめく聲より、梶原源太景季
鎌倉一の風流男、戰場立歸るゑぼしのかけ緒古實を正し、大紋の袖た

ふやかよ座敷へ通れば、母の延壽、何源太が歸りしかいづらやくと立
出給ひ、源太頼朝卿のほ運つよく木曾殿を亡し給ふ範頼義經兩大將
を初め参らせ誰とも恙なしと聞つるが、顔を見て落付ました仰のごと
く木曾の狼藉早速又切ちづめ押續て西國表平家の大敵攻亡し法皇の
宸襟を休め奉らんと攻支度の評定取と父も益に勇健先のからぬ
母人のほ有様拜し乍て祝着と謹で述ければ、いやとよ源太、都の赤軍あ
かべ、そなた一人歸されし心得す、父の仰は聞ざるか、いや何共承は
らず、鎌倉へ立帰り仔細の母も尋よど仰も辭がたければせひ又及ず罷
歸る、母人のほ方へいかゞや参りしやらん覺束なしと窺へば、軍内
が渡せしみ箱、是見よ封もまだ切す、心元なや披見んとふた押明る共隙
よ千鳥の懸しい殿の顔守つても親子の中、包む懸路のやるせあさ、
や源太様常さへ旅は憂物よ、たんとほ苦勞なされしやらふ顔のほそつ

た事はいな、お氣もじ悪ふへござりませぬか、おほらしいうちが問で
氣が付た身が發足の時分より弟平次病氣で有たが本腹をしめされた
かえり本腹やら立腹やら達者過てめいわくを致します、夫は一段どこえ
おゐやる對面乞たい、イヤ兄者人平次是より罷有と、一間の内々のさばり出
先何角指置て聞たい、宇治川の先陣見事な高名遊ばしたでござらん
の、此源太が身より取ては過分なる今度の高名、何高名とは珍らしい
お咄なされ承らん、語つて聞さん承れ、去程より義經のせいは都合二
万五千餘騎、山城國宇治の郡より押寄る、比は睦月の末つかた四方の山より
雪解して水倍増りし彼大河宇治橋の中の間引はなし、向ふの岸より亂
杭逆茂木すき間もなく、甲たる武者五六千川を渡さば射落さんと、鏑を
揃へて待かけたり、かゝる時節より渡さずば、いつか譽を顯はさんと、我君
お給へつたる臂墨と云名馬より泥障はづしてゆらりと打乗名より桶の小

嶋が崎々遡散さきさきのりかたん、かけ出せば、つゝいて跡あとみ武者一騎ひとり春のあしたの川風
よ、さそふ響ひづわの音おとへりんく、誰だれなるらんと見返みかへれば古歌こかの心こころみにたる
ぞや、おぼろくと白玉しらたまの霞かすみの隙ひまをかけ来るは、佐々木四郎ささきしろう高綱馬たかつな、馬まのね
とらぬ池いけ喫さきする脣墨すみ二騎ふたり相並あいあらわんでざんぐくと打入うちこむるアレ兄あにじや人ひと、是迄これ
咄はるしもならふ、是から先しあるが勝負しほうの肝交かんこう、自身じしんよへ云いふくら、兄弟よしわの佳平よしら
次こがかはつて咄はるさふと、いふよ千鳥ちどりが聞兼きみて、兄あに様さまの高名たかめい咄はる横合よこあいから
腰こしおらすとだまつて聞て居ゐさしやんせヤフいやらしは肩持かたもちな、われより
構かまはぬ今いまの跡あとへかうで、あろ、佐々木ささきは聞ゆる剛がの者もの、兄あに貴きは知したぬるま
殿殿、ついよ佐々木ささき乗負のりまけて、いやく何なんのああたが負給あたはせはん、玄くろらぬな
がら千鳥ちどりが推量すいりょう敵てきは川かわを渡わたさじと水底みずそこ、大綱おほつな小綱こつな十文字じゅうもんじと引渡ひきしし、駒こま
の足あしがを惱なうせしよ、相智さなちの源太景季げんたけいす太刀たてつを、するりと抜給ぬきあたはせひ、大綱おほつな小綱こつな切き
流ながしく、なされたでござん玄くろやうう、千鳥ちどりがいふよ遡のあく、綱つなを残のこらす

切拂ひ佐々木が乗たる池塘より、一段計乗勝たり。聞給へ負へなされぬ
嬉しさや夫聞て痞がおりたと悦べ。平次頭を打ふつて、某佐々木又成
かはり一問答仕らん。其時高綱大音上、コレ景季馬の腹帶が延ひ、鞍かへさ
れて怪我有など聲をかけたで有ふがのま、委しくも能知たり。某はつと
心付、弓の弦を口よくへ馬の腹帶又帶手をかけ、引上ゆり上志つかと
志める。夫がうつかり延ね腹帶を見ぬ
いた計畧、うぢくめざるし其隙又、さつと佐々木が打渡つて、宇多の天
皇九代の後胤近江源氏の嫡流佐々木四郎高綱、字治川の先陣なりと呼
へりしれ。天晴手柄。こなたは大耻、みぢんも違へ有まいがと倍よかしつ
て、耻しむれば、源太ハ黙していらへなし、傍からばくとあせる計又女氣
の、何とせんかた泣千鳥、平次景高せしら笑ひ。といつもといつも吼づら。
テ氣味のよい事の、シ母者人慾領の耻かき殿を玄まへといふて來ませ

うがの、其状おれよも見せさつ玄やれと、指出す腕を擲のけ、此文の母への名宛、何が書いて有ふと儘そちより見せぬ、母を指置出玄やばるなど、
呵る聲さへふろく涙又くり返す文脉、心をいためふへします、子
又甘いも事又寄生て置程親兄弟の面よごし、コレ爰な腰抜殿、せめてハ親
の催促待てこようと思ふ氣はないか、夫も成まい世間ハ切腹した
又して其首刎て塙明ムと、ずばと拔て切かしる刀の鐸際むすと取兄親
又對し尾籠の振廻、腰抜の手並腰骨よ覺へよと、引かづいてぞふと投付、
起しも立す刀の背打とくはつしと云ちのめせば、あいたくと顔
玄かめはふく遡てぞ入みける千鳥源太が母へ上る子細有、次
へ参れと人を除かくやさば景季が命惜むにたれ共、ゆめく助る所
存又あらす、此度宇治の合戦前、父みてし平三殿軍の勝負を試んど、
しもなき的を射損じ、其矢が計す大將の白旗又當しは、味方の不吉、父

の不運や譯立がたく切腹せきぱ又極りしを、佐々木四郎ささきしやうが情よつて君のほ
前を云直をなし父の命を助たり、其場ば又某有合あつあす、跡あとよてかくと承うけたまはり、佐々
木又逢あつて一禮まいれいをと、思ふ間もなく早合戰はやかつせん、宇治川の先陣せんじんの我も人ひとも望所、
有が中なかよも川を渡すわた、佐々木と某もし、なむ三寶父さんぼうの爲ためよへ恩有おんゆう佐々木、此
人又乘勝のりかつてのりかつ侍さむひの道立だいろすと、心一ツいつ又了簡定りょうかんていめ、先陣せんじんを彼かれ又譲譲り手柄てがらさ
せしせし情じやうの返禮へんれい、後あとを取とし某もし元來覺悟もとよもくわくの上うへなれば、耻はずも命みこともちつ共厭ともいさむ
す、先陣せんじんの高名たかめいふさくふさらぬ孝行こうぎくの、高名たかめいと存そすれど白地しらぢ又され
ぬ、武士ぶしとくの誠まことの情じやう、父ちちの爲ためよ捨する命みことふ暇ひま又母上おふくろと指添さしざへ又手てをか
くれべ、やれ待源太まつげんた、それ程知した身みの云譯いひわけ、父ちちへりなせ云い、いや云譯わけ
仕つかまつれば、佐々木が手柄てがらを無むとする道理據ほんとうなく母人おふくろへア上あがしも本意ほんねなら
ず、死し後ごとても此事このことは沙汰さたたあされて下くださるないやく、夫かれ若氣わかげの丁ぢ

さん簡かん

今死はじで忠孝ちかうあらぬぞよ、こお仰あお共覺ともおこへ、義ぎを知して相果あいはれば忠ちゆうも

立孝も立いや立ぬなせといへ、梶原の家ハ坂東の八平氏、其氏を名ム顯
れす、平三殿の惣領のそちなれば、名を平太といふべきを、源太と付し
ハ添くも、征夷大將軍源の賴朝卿石橋山のふし木隠れ、危きに命助られ
し、平三殿を命の親と宣ひて、勿体なくも家來の子を兄弟分又思召れ、源
の氏を給はり、源太とのらせ、源氏嫡流の召有産衣といふ鑑迄下さ
れたゑぼし子爰をよう合點仕や、今命を捨てて、な産の親への孝行ハ立ふ
が、烏帽子親の我君へどの命で恩を送る、主なり親あり忠孝が立ぬ
とい、爰の事をいふれいの、其は恩をわすれ致さぬ、烏帽子親とハ憚
り有、主従ハ三世の契り生かへり死かへり君よ仕へる侍の魂ヤ情あい
三世の契りのお主よハ未來でも逢れうが、親子ハ一世此世計で又逢れ
ぬ、母を置いて死ふといふ子もどうよく殺せと書いて送られし連合ハ猶ど
うよくわるい子でさへ捨棄るハ親の因果、まして健氣な子でないか虫

けらの命でさへ科ない者は殺されぬよ、ちりあくたかなんぞのやうよ
心やすそと捨よとは父の計の子かいのよ、母が爲もも子をや物を問談
合え及びもせず軍内を檢使けんしみやると、逸徹短慮な此文体見るもうらめ
しいまくしどすんくみ引さきく口よ舍でかみ立たき夫を恨子
をかこちわつとさけび入給ふ、母の慈悲じひ心きもよめいじ六根五臟ごうを立
ぼり出す、なみだもあつき恩愛の親子の歎きぞ道理なる、横須賀軍内憚
なくつよと通とおり、親旦那の状覽じょうらうの上じょうにやよ及べぬ、某の檢使の役やう
源太殿、腹はらめされとよがり切ていし放せはるせ、覺悟かくごの兼て極めしと、身づ
くろいする所を母の立より取てふせす、どこへ腹はらどのそ立たてやならぬ、耻はじ
かいた人でなし大小もいであはう拂はらひ、手ぬるい爺とうじの指圖さしふより、きび
しい母が仕置しを見しよ、誰中間共なまぢが古布子ふるぬのこ持もてこい、早はくと呼聲よす
あつとこたへて平次景高かげたか、古わんぼうひつさげ出だ、や母人、此布子このどふな

さるゝどふするといふれた事、こいつめよ着せかへて門前からぼつぱ
らへ、それこそ望む所よと無法の主従立かゝり、傳手よもぎ取太刀烏帽
子、たゞき落されおつぽろ髪素袍袴の帶紐も引玄やなぐるやら引切や
ら、上着中着の綾錦古わんはうみきせかへさて腰にくひ入繩帶しめ付、
われをさつき又投ふつた禮は平次がおすねでいふと、様も下へ踏落し、
さつても氣味のよいざまと一度よどつと打笑ふ源太のかへりし我
姿の耻も無念も忍び泣母の我子を助けん爲人まへ作る皺面顔、いかる
きせいもよが口も詞と心へうち表命がたりの勘當玄やと思ふてかん
まん玄てくれといひたさつらさ泣たさを胸よ包めどつしまれぬ悲し
い色目さとられじと、皆の者があのさま見て、かかしがるので母もか
かしい、あんまり笑ふて涙が出来る、と高笑ひ泣よりも猶あられなり、
千鳥のかくと聞よりも有もあられずはしり出、かなりし源太がうき

姿二目共見もかず、おどうよくな母は様勝も負るも軍のならひ、詫しも
かうした不覺の有物、父は様から殺せと有をふ詫言いなされいで、あほ
うばらひの勘當のと、是がほんのてゝ打母打、二人の親は又憎まれて源
太様のふ身がどこで立、あれ程むごうなされた上へもふ勘忍忘て上ま
して下さりませいと計みて、かつばとふして泣わぶる。此母が采配、こ
志やくあそちが何志つて、ヨリヤよう聞源太めがあのざまに第一の見せし
め、あの耻を無念と思ひや、西國へ攻下つて平家を亡し、手柄志て我君の
御用、又立ペ勘當のせぬ、平次心得たか必手柄を待てゐる、母が詞をわ
するもなと弟が事よいひなして、兄をはげます詞のなどくとくも母
の御慈悲とひ、志る程ふもき源太が額土より付泣居たる、平次景高玄
たり顔千鳥、なんぼ吼ても叶ひぬ、是からひ分別玄かへ泥坊めが事思
ひ切、おれが言事聞さへすりや、母へ願ふて、ヨリヤ奥様じや、嬉しいかとせな

か擲なげべよ、けがらひしい聞ともない憎にくまれ子世よはかかると、何所迄どこまではばかりあされうがいや玄くわやくわ玄くわやいや玄くわや、ヤア玄くわぶといめらうめと擲なげかしるを母押はねしのけ、何玄くわや千鳥ちどりと源太げんたが狂きょうふてゐる、年よりひねた徒者いだすら、こいつれおれが仕様しきょうが有、源太めを追おひまくれと千鳥ちどりを引立奥おく又入いり軍内ぐんない下部しもべ共とも言付いふきやつを早はやふまくし出だせ、イレサおせきなさるゝな、母おやの仰おあせり兔とも角かくも某そなが存そなるるコレかうくと平次ひやうじが耳みみ吹ふきこめぱぎそふ玄くわやよい分別ぶんべつと、二人白洲しらすと飛とおりく聲こゑをもかけず拔打ぬきうちと、源太げんたをめがけ切付きりつけるさ志ひきつたりと引ひばづしかいくゝる身みのひねり軍内ぐんないが諸もろひざかきのめらす隙ひまを又切きりかくる平次ひやうじが刀ともひらりとはづし、ひつ擲なげんでもんぞりうたせ、二人を踏付ふみつけ立たるてこしきよくこそ見へよけれや平次千鳥ちどりが事を根葉ねばと持、兄あと敵對てきたい畜生くじやうめ、今踏殺ふみごろすの安けれど、わるい子迎むかえも捨すてられぬと、母おの詞ことば聞捨きよがすられず助け置おき、源太げんたとかれつて孝たか

行^はみ仕^しれと、ゆん手^てみさし上げくるくとふり廻^{まわ}し、七八間打付^はれべ、からき命をたすかとて跡をも見せずよげて行^ア軍内、親共からの使あれば、儕もどふも殺されぬ、そこを源太が了簡^{れうけん}して、殺して玄^{くろ}まふ仕様^{しづやう}にて、これ見^ふれ、うぬが刀でうぬが首、ころりと落^{おち}すれ自業^{じぎょう}自得^{じとく}果^ご、源太^{いんとう}の殺さぬ手計^{てばかり}うごくといふより早く首と胴との生別^{いきわか}れ、親子の別れ、今一度母のむ目^めみいやく、仰^あみ隨^{したが}ひ平家の戦^{たたか}ひ、四國九國の果迄^{ごご}もぼつ語^{つめ}く、高名^{からめい}し、其時ふ顔^{かほ}を拜^{おがま}づと思ひ歸^{かき}立出^だる、うしろの障子^{しやうじ}ますとひらく音^{おと}み驚^ききふり返^{かへ}れば、母^いすつくと立ながら、源太^{いんとう}が方へ^{むか}目もやらず、四國九國の合戦^{かつせん}も、素肌武^{すはだむ}者^{しや}での手柄^{がら}が成まい、勘當^{かんだう}した子^こも持^たて行^はと教^{たし}へせぬが、頼朝卿^{おもほ}給^{あた}はりし産衣^{うぶ}の甲兜誕生日^{こうかぶたんじゆ}の祝儀迎^{むか}かざらせて爰^{こゝ}有^あ我物^{もの}を取^とて行^は、誰^が否^{いな}といふぞ但^はいいらぬか、主^{ある}ない此^こ鎧^{よろい}早^{はや}取^とぬけ、嬢^{こじよ}共^{とも}、女共^{めぐみ}へどこ^{どこ}よる、こいよ^いくと呼^ははりく

入給ふ、^{ハア}重々深きに憐愍添しくと、かけ上つて甲兜よあひかぶを取のくれべ思
ひがけなき具足櫃そくひつびをすつと出たる妙千鳥ヤアそちの爰こゝより何としてサア是
も母様のふ情不義ききつけをした科で此箱とがより入糺明きゆめいさす、其跡ひきに隙ひまをやる、い
きたい方へ連立つれだてていきかれと、ふ玄ふか深いに了簡れうけん何母人ハシマ有がた
や冥加めいがあや、あだみ思おもひ々逆罰さかばら變かわるん、恐おそろしく是これ直す直み、此源太ちげいたが恥辱ちじよ
をすしぐ合戦かっせんの首途かほお暇ひまや奉ると、母の方おはなを伏拜ふしががみく、おまめでござ
つて下さりませど、いふも盡つくせぬ別れの涙なみだ、ぼり兼たる袖そでの海うみ、ふかき
は恩おんをかうむりし、身一つあらぬ友千鳥ともちやなくく出しが又立どまり、
ふりかへりての親と子のはてし名残なごりのうき別れうき世よの、うき身かこ
つらん

○第三 道行君みちゆきが後綱こうつな

捨る身を、捨ぬ、はだしの子ゆへのやみ、空そらもあやなき曉あかつきの、髪かみも形かたちも宵よ

儘世のうさづらさ、悲しさをいひぬ色なる山吹後前、月さへ西よ落人の、
桂の里のなんぎより、あるべの方よ一夜二夜、あかしくらせど忍ふ身り、
都ぢかくも物うしとけふ思ひ立俄旅、人目をはづる、取なりの身よは、
もなき麻衣の木曾路をばして行道の、あゆみくるしく、真砂地をよむ計
なる桂川、ふ筆がせなふふさむこさむ猿のべしかつてきえよかつて
めしたる若君の、あやうき所をのがれしもまさるめでたきほうんのつ
よさ、なき我つまの種よ形見よ、わすれ草、やけのしきゝす夜の鶴子を悲
しまぬひあき物を、まして、いへんや人として、親の別れを、白糸のちすじ
をわけし父君よ、よたりやよたり、いたいけざかり、あれくあれを見や、
ふたつされたる雲井のかり、古郷へ歸る、我よも君の古郷へ、歸れ共ふし
のかた羽のとぼくと、子よ迷ひ行さよ千鳥つまも迷ひん三つ瀬川、四
つ塚東寺九重の都の中のふのづからかたむく笠の打えほれ、今落人の

身の上も人よぢられし白川の水もよどみてあひた山あれれ父なき稚
子をすかせば肩よすやくと轉ねいりの餘念なき爰こぞばが懷ど
所の名さへ有物を、か乳も添乳もなしきそなきそ、ひるねの夢にかへら
ねどかへる姿のそ耻かしや丸寐がちなる我よみ色も、有かど袖袂ひく
なひかせし日の岡の戀のとうげもこへわびて、いやといふのれあ浮世
のならひよさいな底の心にほんに名ぢらいでさいな、それが、宏よいなま宏
よいなはるかようたふこゑぐい、松を志らぶる春風かそれがあらぬ
かごたましてやうく跡を老の身の道ふくれて鑑田隼人娘がかた
せ休めんと抱取たる駒若丸、ふとせでおよれよい殿、ねんくねんねこ
せいいどしい殿よ花やう花やうく花一時とながめても君の館よく
らべてハ盛久しく若君も父の武勇を受つぎて生長榮へましませど
諸羽の宮よ人ドハ暫く法施奉り今たどり行道芝もさいつ比木曾殿

の、鞭打給ふ所ぞと聞べ草木も外ならず、浮世なりけり世なりけり、きの
ふめでたき人だ又もけふいたゝかふうたかたの、あへづが原の討死を
思ひやる。さへ悲しやな、矢一つ來つてわがつまの内兜み射付しひ、天の
簪か武運のつきかついよ其手で馬上をおち、おちの土となり繪ふ、所
あれよあの雲の、下こそ君のさいご場と見るよ付語るよ付袖ひ、涙の春
雨よしほれ詫つゝ山吹も心地すぐれす見へ給へば立寄いさめ慰てい
ざさせ給へとほ手を引見渡せば、春の日あしも走井やならはぬ旅よ身
もつかれ、世のうき事をゆふ嵐さらゝさつと吹くれば、つまも裔もひ
ら／＼ひら／＼と吹分る、追分過て大津のしゆく、今宵の爰よかり
枕袖をかたしく旅やどりつかれを晴させ給ひける、東路をのぼりくだ
りの旅人も、二つと三つよ追分や大津よならぶはたゞやの棟門多き其
中に名高き關の清水やがとくより奥よ客とめて、料理持へまな板の、音

もてきく亭主が氣くぱり下女も男もそれくみ茶運ぶ風呂焼人と
める門賑はしきたそがれ時あらたらと道引給へ觀世音はこぶあゆみ
の順禮姿背よ國名を笈摺の年ハ六十よ色黒き達者作りの老人が娘と
孫を打つれて胸よかけたるふだらくや紀の路大和路打過てけふも暮
ぬる鐘の聲三井寺又札納め爰かそこかと指のぞけば亭主がしけ出で
コレ親仁様お泊なら脇ひら見まい名代の清水や座敷がきれいな木賃が
安いサアおはいりと引どむればこれくろめつた又引ばつて着物破つ
て貰ふまいなんぼとめたがりやつても木賃を聞よやほかくとはい
らぬ親仁サアいくら玄やきりくいふた。定りハ三十なれどよい様よ
してとめましよわいキヨイ様とはよい衆の事、おらはすんとびんぼな
西國道も杓ふつて順禮よほうしやで貰ひ溜の米も有どたつた今
跡の石場で蕎麥をしたしか玄てやつたりや腹袋よ足が入てあす迄養

焚も何よもいらぬが、ナント甘宛でとめぬかいアそりや安けれど順禮衆の
事じや物儘よ負ましよ、イヤやすうへないぞや、錢の高いか合點か、乞かけ
てつかへば五分四五厘利が有すぎよ、サアそんならおよしわらぢとけ、サア
ほんあがろ、ヤ乞い／＼と、謙隔て次の間々打窓いで、扱あるいたり、けふ
の大道そちも草臥、お里や猶の事道べたで氣計いらくら船頭と謙は、陸
で塚の明ぬ物、やれ玄んどや腰いたや、其枕取てたも、やい／＼
松よ、其襖明ん物玄やこひいぞ／＼、リヤ爰へこい玄しかんでやろ、キタ
ない涕でり有ぞ、あれ／＼又飯ごり引出すわい去と、只手のあいや
つほんよ夫で思ひ出した、宿の衆、どれぞちよつと頼ま玄よ早ふ／＼
ミこれとつ様けたゞましい何ぞいの、此飯ごりがさ／＼と洗ふて貰
てあすの出立の残りをつめる菜は茄子と大根を取交香物のこけら鮓
頼んで置と詣へぬたつみあがりの、とんきよ聲夫といひねど紛なき舟

乗とこそ立られたり、同じ浮世、み憂思ひ、人忍ふ身ひおのづから茅にも
心奥座敷山吹^{ハシマツ}前へ先達て爰^{アサヒ}、又やどりを假初^{カタハ}も、ならぬ旅^{タビ}よつかれ
果^{ハシマツ}はこゝち例^{ハシマツ}ならぬべ、お傍離ぬ鎌田集人娘のか筆諸共^{ハシマツ}いたへり、介^{ハシマツ}
抱^{ハシマツ}する中^{ハシマツ}、何のがんせも泣出^{ハシマツ}す、駒若君のやんちや聲^{ハシマツ}襯^{ハシマツ}一重^{ハシマツ}、^{ハシマツ}聞^{ハシマツ}も氣^{ハシマツ}
のどく^{ハシマツ}ふよし、あちらの旅人も子が有そ、ふながさつてもせがむり、わ
やくいふな^{ハシマツ}だましてもすかしてもおこりおるとどこみも迷惑^{ハシマツ}、な
んぞやりたい物^{ハシマツ}玄やが^{ハシマツ}、夫よ^{ハシマツ}童^{ハシマツ}すかし^{ハシマツ}、こんな時、今跡で買^{ハシマツ}た大津繪^{ハシマツ}
一枚^{ハシマツ}やろと取出^{ハシマツ}すを、樅松^{ハシマツ}が攔^{ハシマツ}んで放^{ハシマツ}さべこそ、いや玄やく^{ハシマツ}と泣わめ
く^{ハシマツ}、こりやく^{ハシマツ}破^{ハシマツ}るあやい、玄ひい坊主^{ハシマツ}め^{ハシマツ}よう合^{ハシマツ}黙^{ハシマツ}せい此繪^{ハシマツ}の座^{ハシマツ}
頭^{ハシマツ}の坊^{ハシマツ}が輝^{ハシマツ}を大^{ハシマツ}がくへて引所^{ハシマツ}、こりや目がなふて面白ない、よその子^{ハシマツ}
よやつてのけ、我^{ハシマツ}よやこれく^{ハシマツ}衣^{ハシマツ}きた鬼の念佛囁^{ハシマツ}くだく、撞木^{ハシマツ}を持て鉦^{ハシマツ}
くれんく^{ハシマツ}く^{ハシマツ}と、紛^{ハシマツ}らす中^{ハシマツ}ふよし^{ハシマツ}が襯^{ハシマツ}押明^{ハシマツ}て^{ハシマツ}

中お隣の、おちいさいのがきつい泣やう、是進せましよと指出せば、お筆
が取て押戴、是れへく添い、お前も子達が有る、よい物しんせて下さる
した、これへくあつか、よいの亥や、餘所のやうはらうじませおとな
しい事わいの、あのおつ志やる事へようおとなしかろぞ、其わんぱく
さ意地わるで、どうもかうも成こつちやござります、此お子へ三つなれど、年よ
ういよいお子やのふいくつでござります、此お子へ三つなれど、年よ
はでござんす、扱もしやく、そんな里や是とおない年、同じ三つと
云ながら此坊主へ、二月生れで年づよ、夫でか大がらよも有健しい子
でお仕合、見れば順禮さ、亥やんすそふなが、奇特な事や所へどござ
所へ是から大方十二三里も下、およし主の贍さぐる様よ、ぐづぐ
亥た物の云やう、たつた一口つい津の國の船頭じやといふたがよいわ
い、せひしない、ちつと人よも物いらせたがよいわいの、聞て下さり

ませ、此様より乳香子を抱へ長旅を致しまするも、私が稚なじみ、此子が爺へ隨分達者な人で有たが、ふと風の心地と病付たが定業やら間もなく死れて今年がてうど三年又當りますれど、何を供養施も内証のかいへ廻らす、西國へ結構あ事じやと聞べ、せめて足手を引て成と夫のぼだいを吊たさみ思ひ立ての順禮と語るを開て山吹お前、あの子も三つ我子も三つ爺親よ別れたり、果報拙なやいとしやなふ、自とても殿に離れ便なき身の旅の空世よりよた事も有物と、身よつまさるし涙聞たかふよし、あなたも亭様がないといやい、そりや悲しい尤玄やが、生身の死身合せ物の放れ物、何泣ても返らぬ事、さつぱりと歸て早ぶ男を持玄やりませ、ハテそふなけりや我も人も、肝心の商賣が成ませぬ、夫でこつちも近比幸な者智み取たが、此およしが枕の取様がよい故か、何時共なふ帆柱立て、乘まする押まする舟一まきならざれく、そこでお

らり一たすかり大舟の乗た心外の望の何のもないが、たつた一色のアいづくの浦のでも、ない物の金かねと化物、有物の質しちの札ふたと借錢しゃくせん、こいつも根繼ねつきでござります、見りやお前方まへがたのよい衆しゆそふあが、どこ元からどつちへござるだと、問きれてお筆ふきが取とり繕つくろひア我わより都みやこを離れ、片山里かたやまざとから信濃路しなのぢへ心寄こころよし、聞きへた善光寺ぜんこうじ参まいり玄げんやなだ、いかよもそれそれそ、夫めよ付つてなんぎな事ことは是これはござるお主様ぬわかが俄ひそのほ病氣びやうき、お道理どうりで有あつい、是これ迄道ごくぢ一里いちりとお捨すひなされた事ことなけれど、おつかれの出でるも尤もわもしらが足あしさへ草くさ鞋くつ又またくられて、まめが出来できたでござりままよ、そりや針はでつかまやりませ惣財豆なまめといふ物の、突つと玄げんくく汗あせが出来できます、これとつ様ようひよかすかと出ではうだいな何なにぞいの、ヤやひよかすか玄げんやあい、ようある事をいふて志しんせる、レレまだいの、笑止せうしな人ひとやと袖そでおほへばくわくちつ共ともくる、しうない、最前さいぜんから手前まへも出でて、挨拶あいさつするも合點あてんなれど、却かて興おきもさめふ

かとわざと扣へて居やた、今娘がいふ如くほ主人のほ病氣親子の者か
仕介抱も旅宿なれば万事心よ任せず何がなお慰と思へ共口かるもたき
我までハ塙明ぬ正眞の旅ハ道連、かう打寄も他生の縁ノ遠慮なし何
成共、お氣のはるゝ咄しを頼む、且那殿こりや迷惑、からハ咄しの何は
も玄らぬ、有ぞくたつた一つ咄しま玄よ、昔よちいハ山へ柴かり
えばもハ川へ洗濯しよ、これく、そりやあんまり子供も知た昔咄し
古いく、サ古いヌよつて洗濯玄まする、洗ふても磨ても、あたもしう家
らぬ物ハ寄年と此顔の真黒なり玄つかい牛もふ寐たとよござりま玄
よど、蒲團てんでヌ寐轉びて、咄し半ヘ亭主がヌよつこり、ア、こりや皆ま
だお休なされぬか、さらハ行燈を取ま玄よかい、此儘置ハ油代が十文出
まする、そりや合點玄ややつぱり置たり、爰で一つ談合が有、両方兼た
此行燈、そつちもこつちも勘定づく、何と、三文まけて貰をかい、二枚も之

まかい風のかは、おらが風より此蒲團はせうやらうぢく、千手觀音
おらぬかや、勿体ない順禮が觀音嫌ふてよい物か、信ありや徳有寄
特よは道中けがのない様、乗うつしてござりましよと笑ふて、勝手
入はけり跡の互々旅草臥子供の添乳肘枕畠のあども轉寐みどろく
寐入折こそ有、村中をかけ廻る歩行がよよつと門口から、亭主内よか
ト何ぞや、何じやはお尋者きびしいに詮義委しい事は來てきかしや
れ、今ぞやちやつと／＼そぞやいかざ成まい、遅くは庄屋のたくら
者、又頭から囁じや有と氣もわくせきだかた／＼、羽織引かけ出て行
既よ其夜も更渡遠寺の鐘も幽なる、灯火細くかけさして、四方よ人音し
づまりぬ、旅ぞ共しらぬ、稚子隣同士宵寐まとひの目をぼつちり、ちぶさ
離れてそろくと這出て一人よた／＼笑ひづむりてんくてうちく
あれ、間の襖をこへ行べ、こなたの子も出て這廻り、諾あふて寄ござり、

おせく 小ぼうしがおない同士互々愛するごとくみて機嫌名がほの
しほの目細目きせるぐはたく 手すさひや菅笠取て着たハ松葺はし
がる顔でつかめばやらじとひつぱり合餘念たはるもなかりしが悦ぶ
先みほつと欠も子供の常又行燈み手をかけてこなたか引ばあなたも
引突戻せば押かへし引あふ拍子よ土器ゆり込灯火ばつたり眞暗闇我
と我手よ驚てわつと泣出ず子供の聲寐耳よ炯目覺す人ド。こりや何
事とうち付中亭主が注進先よ立榎原が家來番場忠太大勢引連かけ來
リ、それ遁すなと下知すれば捕たくと乱れ入る音よ驚家内の騒動震
ひわなしきあつたふた危さこひさも暗紛れ行當るやらこけるやら上
を下へと立さはぐ風よ烈しき夜半の空星さへ雲よ覆はれて道も文な
く物凄き裏ハ田畠を隔の大藪押分かき分忠義一途よかいド。しく、お
筆ハ片手よ若君抱き山吹以前の怪手を引かけ出て息をつき折もひや

いや危い事、ども様り多勢をふせいで跡から追付、早ふ逃よと有し故め
つたむしやうも走つても、ぐらさへくらし勝手かうてへしらず、どつちへ逃て
よからふとうろつく向ふへ數多のひとごゑ人聲、又むらくとかけ來り道みち
やらぬと無二無三打てかされば叶かなへじと、山吹はなぶに前まへより若君渡し、一腰こし
いてはつしく、てうくつばさの早業はやわざさそく飛とぶちがへ切ひらき弓手
みなぐりめてよ受うけ、ひるまぢさらす戦たたかへば、さしもの大勢おほいたまり兼逃かねにげる
をやらじと追おて行跡あひみはあく、山吹はなぶに前まへ長なが追仕おひやんな戻もどつてたも、此
隼人はやと人はどふ仕しやつたゞ氣づかいやあぶなやどあせる向ふへ打合うちあ切合きりあ
切結きりあび追おつまくりつかけ来る番場ばんばを相手あひてよ鍊田隼人はなぶ忠義ただよみさへたる
切先きりさき先さき、受うけつ流ながれしつ上段じょうだん下段げだん秘術ひじゆをつくし戰たたかひしが、忠太ただつがいらつて
打刀たて、受うけはづして弓手ゆのてのかたさきけさよすつばと切下きりあられ、心き鬼神じんじんとはやれ共とも腕うでもよれり目めもくらみ、足あしを立たて難かなたぢく、ようくくとよ

ちめく所を付入付込たしみかけどゝめの刀一ゑぐりはつと驚く山吹
後前遡しも立す向ふへつし立サマ女其悴渡せくサテ何者あれば此狼籍
様子が聞たい合黙がいかぬマ様子ハそつちム覺有筈ハズ朝敵謀叛の義仲
が憐敵サガシテキの末ハ根ハ斷て葉を枯すカラテせひもなや此子一人助タチた迎さまで
怨ハナもがいよも成まじ生ハタハタとしける物ハとハ物の哀アハハれハる物ハぞ取ハシわ
け武士ブシの情ハタハタを忘ミツカラ自ハタハタともかくも此子が命タチを助タチたい慈悲ヒツジ玄スミやくとく
玄スミや後生スミヤウ玄スミやと涙アヒミダと俱ドモ詫ハビ給ハシふタマあまちアマチこいならぬくアマチ當歳子タマチコでも
男ヒトのハタハタがき生ハタハタ置ハサハサてハタハタ後日ハタハタの怨諱アダギリいハタハタすハタハタとハタハタ渡ハタハタせハタハタとハタハタ飛ハタハタかハタハタつハタハタて引取ハシれハタハタわ
つハタハタと泣ハタハタ子ハタハタを放ハサハサさハタハタじと取ハシ付ハタハタ給ハシふタマを振ハタハタはなし突ハタハタ飛ハタハタせハタハタバ又ハタハタすハタハタがり付ハタハタはねの
くれべむハタハタ玄スミやぶハタハタり付ハタハタやらぬハタハタくハタハタと泣ハタハタ給ハシふタマ面ハタハタ倒ハタハタな女ハタハタめと鶴ハタハタ園ハタハタんで投ハシげハタハタ付ハタハタればうハタハタんと計ハタハタみ息ハタハタたへハタハタ、其隙ハタハタよ若君ハタハタを宙ハタハタ提首ハタハタはつしハタハタと打落ハシし
小脇ハタハタほかハタハタい込ハタハタ飛ハタハタが如ハタハタくよかけり行ハタハタ山吹後前ハタハタの夢心地ハタハタむつハタハタと起ハシてハタハタ

悲じや、西も東も辨へぬ此子ふ科のなき物を、むごやつらやどうよぐや
かへせ戻せの聲も遙よお筆が聞付、息を切て立歸りはつと驚抱かしへ
レお心ハ慥なか若君様ハどこよござる様子をおつたやれサとふじや
くとせき切て問バ答もくるしげみ、お筆か遅かつた情なやなつた
今追手の者が爰へきて隼人も討れ駒若も殺されたシ首切て逃たわい
の、と仰天狂氣のごとく鞠て詞も出ばこそ胸も張裂悲しさの涙はら
はら立たり居たり身をもがき歯を噛えめ、口惜や今一あし早くばな
あ、女でこそ有やみくと討しへせまいよシ其切たやつれどつちへ逃
た顔見えつてござりますか、此くらさでハ夫も知まい名ハお聞なま
れぬか、イ顔も名も忘らねど、梶原が所爲で有ふ、かへいやわつとたつた
一聲泣たが此世の暇乞父はといひ子といひ刃よかしりはかなき最期
利へ是迄付添忠義をつくす隼人送爰で死ぬとの約束か、これそもそもいか

なる前生の報ひか罪か淺ましやど、身も絶る叫び泣、お筆も有みあら
れぬ思ひ、父のさいごへお主へ忠義悔む心へなけれ共、おいとしや駒若
様けふの今迄あいら立ちわたしを廻しかた時離さず抱かれてないつ
笑ふついたいけな、お顔をやつぱり見る様などくどき立く、聲も惜ま
ず歎きしが涙の中よ心付せめて一目若君の、お死骸なり共見ん物とあ
たり見廻し尋る心も空も闇、あやしや血みそむ稚からだ手みさげるを
かき抱き涙と俱み撫廻し、此きる物ほどふやら手障もちがふ、そ
して何やらびら／＼とこんな物めさぬ筈合点がゆかぬとよく／＼
すかし見、ア是れ違ふたや／＼、こりや若君でござんせぬ、ア何といや
る駒若でないとい、ア此死駒の筈摺かけてゐるわいな、それ／＼ほんよ
かはつたこりやどう玄や、是は／＼と二度恂り、ア扱い今の騒動と相宿
の子と駒若と取ちがへたか、悲しやう、これ／＼そりや何おつ立やる、

悲しい事へござんせぬ。取ちがへたのでな、若君のお命と氣遣ない、是
則天の恵は運の強さ。嬉しやく有がたや。お悦びなされませ。す
やし、是はしたり、おせ物をおつまやらぬ、ハ、又眩暈がきたそふな、これは
是ハミ、お氣のよはい、ふがいない事で、有ぞ、これへ、ナと、いへ共よは
る身の上、悲しさつらさ、氣をもみ上、又嬉さみがつくりと引取息もあ
へなきさいご、お筆へあはてうろく、きよろく、こりや何とせうどふ
せうど、脈取て見つ耳、又口、これくや、山吹様いなふと、いふ聲さへ人を
憚り、思ひ切て呼れぬか、情ない、どんなと心へちとくだけ共、早色
かばかり手足は冰と冷切て、押動かせど其かいも、涙先立、魂も俱み消入
き思ひ、大地よかつぱと伏まろび、聲の限を泣つくす理とこそ聞へけれ
やも、有て顔を上、ア、そふがやく返ぬら事、悔むまじ、歎くまじ、一先此場
を立退て、妹千鳥と心を合せ、お主の怨父の敵逃隠るゝ共天地の間、命限

り根限りやいか助て置べきかと、かけ出しがくく夫より大事のく若
君片時も早く取返そふといや待たべし死骸を此儘捨てず無縁の此
子父の體諸共よ隠さんとの思へ共前後も満たる多勢の追手隙とらば
却て妨せめてお主の面影を先々かしへ葬らんとあたりよおげる竹
切で、かき上乗する筆の葉れなき魂むくる興車、なが名もほそき千尋の
竹肩よ打かけひく足もえどろもどろよ定めあき淵瀬とかへる世の憂
を身一つよぶる涙の雨の、おやみもやらで道のべの草葉も、ひたす袖袂
なくくたどり、「行空の難波漏わし火焚家の片庇、家居みに似ぬ里の
名や、福島の地のおしなべて世を海渡る舟長の、有が中よも權四郎とて
年も六つを十かへりの松右衛門といふ通り名の養聟よ譲りやる門み
目充の松一木所よ蔓る親仁有志す日よ邊近所のばゝ曉達ふ茶参れど
て招かれて、權四郎様けふ志しの日じやお茶呑とおよし様の直みお

使から共ない添い誘ひ合せて參つたとぞやく 内又入ければよふ
そりけふり娘が前の連合此樋松めが本のとゞが三年の祥月命日又
當つた故謹い茶を焚ました香でゆつくりして下され常あら箸でもと
らせます筈なれど玄つての通足よしな娘や孫を引連て順禮の長道中
物入の跡何とも玄ませぬどりいへ娘なんぞないか何ぞとやたら人手
へなし此子へせがむほんの心計をばあがつて御回向頼ますと霞交り
の煎豆又端香持せて汲出せばもふ三年又成ますかゞ月日又關守すへ
されば玄やの今松右衛門殿へござつて間もあく玄みぐと付合ね
ば心入へ玄らぬが死玄やつた此樋松の爺ひれてうど此又ん玄の太
糞の様又毒又ならぬ人で有たよいとしやく南無阿彌陀皆回向して
お茶参りませ海鹿のかあへ此たんぼう揃もうましと舌鼓茶請み咄し
噛交てあだ口々のやかましさ皆船頭の女房とて乗合舟のごとく也

よい序玄や權四郎様お尋たづね事が有、別の事でもない此わるさ殿、連て順禮なさる迄まことに色黒くろ又肥ひふとつて年よりせいも大がらだいがらよ病氣やまいきなふてほんの赤松走かした様よう又門を家と遊びやるを見てり、あやかり者玄やど羨うらやんだ子が何として又此様よう又色白しろ又瘦やせこけて思ひなしか顔のすまゐもかへつて背せもひくうよりくと外へとてハ一寸出だす、あれが順禮じゅんれいの奇特きか觀音くわんおん様ようのほ利生りじゆうかと打寄うちよてハ是ぜざためんよな事ことやと尋たずねれば、されば其事ことありや前の梶松かじまつ玄やござらぬ違ちがふたくちがふた譯わけ思ひ出すものふ恐ろしや聞きて下され娘むすめよ何どう日の夜やらで有あたな、廿八日じゅうはの夫め丈跡あひの月の廿八日三井寺の札ささを納なめて、大津おおつの八丁はっちょうよどまる夜、何かは玄くわらす上意じょうぎ玄やどつたくと大勢おおぜいの侍さむらいが、見みさしやれ畠はたけしするさへ身みが震ふるひます、ほんの世話よひといふうろたへては子こを倒たおしとふ負おたやら娘むすめが手てを引ひたら走はしつたやら飛とだやら漸毒蛇せきどくじゃの口くちを遁のがれ逃にげ

て行先の又狼谷の水音松吹く風も跡から追手のくる様思はれ、折
も命い有物かな眞黒の夜四里たらずの山道を、息一つしかばこそ、水
一口呑ばこそ、命からぐ。伏見へ出て、初て背負た子の顔見ればあむ
三寶相宿の襖ごし、宵よ咄しもしたわろが、連た子と取ちがへたと極つ
た太儀ながら一走いて、もとへ取かへてきてくれと娘のせがむ。
尤取戻してこふと思ふ程先のこはさ、いかなく一足も行れるこつち
やない、今よは限らぬ取かへす折が有ふ、先のわろも子を取違へ人の子
玄や逆どろくへろくみへしておかぬ筈、此子さへ大事よ育て置たら三
十三所の觀世音の力枯たる木よ花さへ咲玄やないか、一先内へ戻つ
て、漬した肝をいやしてから上の事と、畫舟よ飛乗て戻る中、乳呑ふと
泣持合せたを幸よ、娘が乳呑せたら夫なりと月日も真名もしらねば呼
付た梶松くくといや我名と心得祖父よくと馳あ玄むいにくしよ。

今でいほんの樋松めも同前よ、かへゆござるといふ聲も咽み、つまらす
老心、娘も俱え涙ぐみ、時の災難とい云ながら、縁有べこそ此子が手鹽み
かしり、他人がましうもする事か、嘆様くと此乳を呑もすりや呑しも
すれ、はじめ我子も同じ事、此子憎でい夢いさしかなけれ共、けふの亡
者の手前も有ならふ事ならて、つ取早ふもとくへ取戻したうござん
すと語るを開てば、かゝ達夫たぢで疑ひ今はれた大願立ての西國廻り現
世みらいの觀音様の引合せ、あつちから樋松を連て、やがて尋て見へま
しよぞいのみ、必きなく思ひぬがよい、サ皆の衆あんまりお茶呑のんでけ
つくおなかも盡するさがり、いざざれふ暇と打連出る門の口、櫂の先さきに笠
かつ付、打かたげ立歸る鷺さぎの松右衛門ホリことや皆お歸りかけふの前の鷺
殿の三年忌、内々居て俱え御馳走申答はづを、遁れぬ用事で罷出近頃の亭主
ぶり、まそつとゆるりとのなされいで、まそつとの段かいの、ゆるり罐子くわんす

の底たゞいて歸ります。餘茶より福が有、否で、お休あされやと住家へ立歸る。親父様今歸りました。茶事の間、又逢ふ益の下でも焚ふと氣がせいても相人へせかぬ。大名のゆつたり、遅なへつた。喰ふ草臥、女房共太儀で有たの、何の太儀な事へない。お前こそ喰ふひもじかろ。ほんよ、どと様ふ歸りなされたかと、なせお傍へいきやらぬどりやまし上ふと立上る。女房まだほしうない。望な時、又乙ちからいをふ、扱う親父様、大名の中、又梶原殿へ、取分の念者とすが違ひない。お召よよつて船頭松右衛門參上と奥へ云て行、やゝ暫くして、乙家老の彼番場忠太殿がお出なされ、先達て指上た逆櫓の事書、一つく、尋る程とける程、問殺した其上で其通あざよ。暫く待よ。暫で有ふぞ。なしの三時待せて置て殿が直よ。お逢なさるし。是へお出なさると、其重くしさ物云のかたくろし。船頭松右衛門と、僭よ。智謀軍術逞しき義經へ、此景時が能存せし。

といふ逆櫓の大事疎々聞受がたし、檣舟又逆櫓を立ての軍調練たる事や有夫聞んと問かけられ此度親父様又習ふて逆櫓といふ事初て立つた此松右衛門返答又こまるまいか、なんぎせまいかほつとせしが分別致し、は意でいざれ共賣船の船頭ふせい、軍といふ物の夢み見た事もござらぬ逆艦の事、我等が家又傳へ能存じて罷有まするなど、少て間合を云たれべ、さも有なん然らば汝覺有船頭をかたらひ、今宵密々逆艦を立、舟のかけ引手縫して其上よりさせよ、事成就せべ、大將の召舟の船頭、汝たるべし褒美、此梶原が取持永く船頭の司として莫太の財寶を下さりよと有る直きのふ詞、其嬉しさ、又初めの術あさ打忘れ、あたふたと歸かけ、日吉丸の船頭の又六灘吉の九郎作、明神丸の富藏、こいらへ梶原様のふ舟の船頭幸三人を相手よとして日暮から逆船稽古、此方へ参る筈、數なされた手際を見せ付立身出世いたつた今、

是とやもに指南のふかげ添い坊主よ悦べ結構なべしきせて持遊び
飽せうぞ女房共親父様悦んで下されど語る聾より開嬉しさ不器用
なやつり千年万年教ても埒ちや明ぬまんざら素人のわり様が入聾
わせられて一年も立や立す天下様の弟ひの召るゝは舟の船頭する様
え成といふれおれが教た計じやない其身の器用がする事でお亥やら
しますよめでたいく智殿の草臥休め娘十二文持て走らぬかい
ほ酒も歸りがけに九郎作が所で下された一生覺ぬ大名の付合膝ひめ
りつく氣骨の折る播磨灘で南風よ逢た様なめよあふて頭痛まぢり草
臥たといふ段でない暮迄のまた間も有ふ親父様ゆるさりませど
ろくと一寐入ふよし見や坊主めが眠るハ幸どしが添乳せんねん
ねんころとかきいだき納戸の内みぞ入よける娘裾よ何でも置たか
出世する大事の體風ひかすな祝ふて舟玉様へ燈明もとぼせ、御神酒上

たい買てくれぬかい買迄もない是をお備へなされませと、棚からふろす難波焼ちらりと用意が有たなど、老のじやれ言輕口も神慮へ重き。一對の、徳利よ餘る親心、妻ハ火燧の石の火よ夫の威光曜けど、油煙も細き燈明よ、心をてらす正直の神や、光りを添ぬらん、妻かふ鹿の果あらで、なんぎ硯の海山と、苦勞する墨憂事を數書、お筆が身の行衛、いつ迄はてし難波渦、福島又來て事とへば門の印のそんぞよそこと松を目充あてよ尋より、ハアに免なりましよ、松右衛門様ハシマサニへこなたか、お名を忘るべよ遙はるトトタツ尋參トナヒつた者、お逢なされて下さつたら添びざんぞよと、物ごしの志とやかさ、とし様、松右衛門殿ハシマサニよ逢たいと女が來た、ろくな事でい有まいと跡先志らで女氣の早慳氣する詞の端興ハシマサニがる暗め、松右衛門よ逢て姉志やといふても慳氣するか、夫程氣づかひなら呼込アヒで、逢せぬ先ハシマサニよ聞アヒたがよい、となた志や女中、どつからござつた、松右衛門内ハシマサニよ居まする遠慮ロクルせずと。

はいらしやれ、夫ひまわくお嬉しやと、笠解捨て内入、お前が松右衛門様か、お近付でなければ、お顔見しらふ様なけれ共、なけれ共なりやあせござつた。ナア何がしるべ、あらふやら、攝州福嶋松右衛門子、樺松と書た笈摺が縁、成て、ナアそんならこなたは大津の八丁で、又跡の月廿八日の夜の、ナアお子様を取違だ者でござんす道理で見た様な顔じやと思ふた事、是ハ夢か現かいのふ、よし悦べ、樺松を取違だ人玄やとやい、此方からも行衛尋てもとくへ取戻す筈なれ共、何を證據み尋て行ふ手がかりもなく、泣て計居ました、其かわりみハ取違だそつちの子供衆、兎の毛で突た程もけがさせず、虫腹一度痛せず娘が乳が澤山な故、喰物はあしらひ計乳一度あまさせず、夫よ、風一度ひかさばこそ、親子が大事よかけたみ付ても、此方の息子めも嘸々厄害に世話で有ふ、よふ連てきて下さつた添いく、^開わるさよ我内を忘^{カサ}れたかなせはいらぬイ門^ム

でひごさんせぬ、と連の衆が跡から連てお出なさるゝか嘸ほやつかい
忝い／＼早ふ逢たいな娘ふ禮をナ志やいのゞ、とゞ様せぬしない、此
お禮がちやつきりちやつとつい云て濟事かいな、テ此槌松ハシモツのあせ遲い
お連の衆が門違ハサカガヘになされぬか、此槌松ハシモツのあせ遲い我子ハコのいかよ孫ハセのい
かよと立かはり入かへり門を覗つ禮云つそゝろよ悦ぶ親子のふせい
お筆が胸ハラよ焼鉄ヤキガネさす今さら何と返答も泣もなかれず指真ハシマツき暫く詞も
なかりしが、お願ひゆさねば叶はぬ譯有て耻ハラハラを包面目ハラハラを凌ハラハラで尋參ハラハラりし
が、そふお悦びあされてい氣が後て物が下されぬ、ア下よ居て下さんせ
と涙ハラハラながら又押ハダハダしづめ改ハタハタてやもあぢきなき其夜の騒手ハラハラばしかう逃隠ハラハラ
範なされた、お前方は順禮の功德、此方は一人は病人なり、男迎ハラハラに有ハラハラよか
いなき年寄ハラハラ遜ハラハラるも隠れるも心ハラハラよ任せず、取違ハラハラた其お子ハコの其夜よあへま
く成給ハラハラふと聞て惄ハラハラりどへ何故ハラハラよいかよと餘りの事ハラハラよ泣ハラハラもせず仰ハラハラ

天するこそ道理なれ人の身の仇なりと兼ては聞ど其夜の悲しさよ
もけふ迄はながらへし云譯ながらの物語聞いて恨を晴てたゞ高ふはい
れぬ事ながら連の女中とやへ私のほ主人騒々取違しとは思ひも寄
ぬ若君は猶太切と私がかき抱きほ病人の女中の親が手を引一度の旅
籠やの憂目へ連れ出たれ共追かくる武士の大勢氣へ樊噲と防いでも
何をいふも老人の云かいなく討死し若君の奪取れ氣も狂亂の様成
て女中もほつたらかし大事の若君取返さんとかけ廻る月なき夜半の
葉隠れ尋廻る筐垣のかげア爰よこそ若君は有と取上て見たれば悲し
やお首がもふなかつたよくく見れば若君でない證據此爰摺駕の
紛れよ取違しな扱へ若君のふ命よ恙なかりけりと一度の安堵せしが
かりりを戻さねば取返されぬ若君もとくへ取戻す種よなる人の大
事の子を殺し何をかりりよ若君を取戻そふ悲しい事を仕やつたと夫

を苦^く病^き、主君の女中も其座^{そのざ}ではかなく成給^{なま}ひ、悲しみやら苦しみやら、私一人がせたらふふた身の因果^{いんが}、此笈摺^{さひづる}を玄^{くわ}るべよて尋^{たづね}参^ねりし^て、お果^{かわ}なされたお子の事^{こと}、歸^きて、此方の若君を戻^{もど}して下さる様^{よう}の願^{ねが}ひ、大事^{こと}又^{また}かけてお世話^{せわ}なされたと物語^{ものがたり}聞^きえ付^{はら}面^{めん}目^めないやら悲しいやらあちきなき身の上を、思ひやつてたべ親子^{おやこ}様^{よう}とかつぱとふして泣^{なみだ}ければ、祖父^{じい}の聲^{こゑ}こそ立^{たつ}ね共^{とも}涙^{なみだ}を者^{もの}よ囁^{ささ}ませて、咽^{のぶ}よつまればむせ返^{かへ}り身もうくやう^う泣^{なみだ}ければ娘^{むすめ}の心も、乱^まるゝ計^かむあしき笈摺^{さひづる}手^てよ取^とて、やれ櫛^{くし}松^{まつ}よ^よ鳴^{なる}り、夕^{ゆふ}の夢^{ゆめ}よまさぐくと前^{まへ}のと^と様^{よう}よ抱^{いだ}れて天王寺参^ねり仕^{つか}やると見^たれ日^ひこそ多^{いた}けれ爺^{とうとう}の三年の祥月^{しが}なり、命日^{めいじ}のけふの日^ひ又^{また}便^{たゞ}聞^き告^{つげ}でこそ有^つらん、夫^{との}亥^{いのし}の凡夫^{ほんぶ}の淺^{あさ}ましよ、けふ^の連^{つづ}くるかあす^の戻^{もど}りやるかと待^{まつ}て計居^{あらわ}た物^{もの}を、大き^な災難^{さいなん}よあふて笈摺^{さひづる}書^かたせんもない、是^ぜが何^{なに}の二世^{にせい}安樂^{あんらく}順禮^{じゅんれい}も充^{あつ}みてならぬ、觀音^{くわんごん}様^{よう}もふが

いなし怖しや懨やあられ此事が夢で有てくれかしと顔よ當抱ゑめて、
聲をばかりみ身もだへし前後ぶかくよ泣ゐたる娘はへまい涙の樅松
が戻るかよまい言ひや二度坊主めよ逢れるか兼てぐちなど祖父が訓
をどふ聞てといふ詞よすがり付夫よかよや私も女子ぢやがぐちでれ
濟ぬ祖父様のおつしやる通いか程お歎なされた逆樅松様のお歸りな
されるといふでいなし再び逢るといふでいなしさつぱりと思し召
誦て此方の若君をお戻しなさつて下さつたら、有がたい忝いと悦ぶ
私が心がどこへいこふ樅松様のみらいの爲よは佛千躰寺千軒千部万
部の經だらよ千僧万僧の供養なされたより女子だまれ何の頬の皮で
がやく頤だしく耻をえれやい我子を我育るより少すの怪我させて
も不調法が有ても親だけで濟共人の子よりなぎとも有情も有主君の
若君のとおりやるからは夫ならぬまんざらの賤い人でもなさそふな

此おれは親代と枕づかを取て、其日暮の身なれ共、お天道様が正直大事。
よかけて置たそつちの子見せうか、いや見せまい、見やつたら目玉がで
んぐりかへらふぞ、人の子をいたはるは、こつちの子をいたりつて貰ふ
かはり、大抵大事よかけたと思ふかい、そんあら又あせ尋てこぬとへ
らず口ぬかそ、うが尋ていかふも何も忘るべの手がしそひなし、そつ
ちよひ笈摺よ所書が有けふは連て来て取かへるか、あすへ連て来て下
さるか逢たら何と禮いへふと明ても暮ても待てべつかり、此襖を見
ふれ、かへいや梶松が下向みかふといふたを聞分す、むりみ買って三井寺
さんがい持てあるいて嬉しがつた、鬼の念佛よ餓鬼げほう殿の頭へ梯
子さいて月代そる大津繪、藤の花の山も買ふらすげほう殿の繪を買
たり、あの様よ罇の玄らが、成迄長生玄おる瑞相、鬼の様よ達者で金持
て世界の人を、餓鬼の様よ這かゝましむらふ吉左右玄やめでたい戻り

おつて見おつたら、喫悦べふと張て置て待たみ、思へば梯子ひげほう天
窓の下り坂鬼の傍よ這つくばふ、餓鬼よ成てお念佛で助かる様よ成ふ
つたか思へば思ひ廻す程身も世もあられぬ、よう大それためよあへせ
たな^ア夫よなんぞや、思ひ歸て若君を戻して下され町人でこそ有探が敵
首よして戻さふぞとつし立上るのふ悲しやと取付お筆を押退はね退、
納戸の障子さつと明ればこひいかよ、松右衛門若君を小脇よかい込刀
ほつ込力士立、お筆驚^{ヤア}こな様い、あの櫛口の^{コヤ}女よ聞へた最前歸り
がけ下の櫛の口で、ちらと見た女中よな若君の身が手よ入て氣遣ひな
じいふてよければ身がなのる、合點か必櫛の口を櫛口などし鹿相いふ
まいぞと^{マサセ}見て志らせば打黙き、志づまる女聞ぬ祖父、松右衛門でかした
りな、さつきよからのもやくや寐られいせまい聞たで有ふそちが爲よ
も子の敵其子骸^{カタ}づたド^{シビト}、^アユ切刻んで女よ渡せ、^イヤそふの致まい、なせ致

まい、ア夫ハサア夫ハミニミ、みづくさい、云ひでも知た、餌が胤を分ぬ、樺松、
が敵、じやよつて致さぬな、其根性で、祖父が儘、もさえやせまい、も
ふやぶれかふれえや、おれがいふ様、ませぬから、親でも子でもない娘、
そこらかけ廻つて、若い者大勢呼で、こいと氣をせいたり、調待女房人を
あつむる迄、もなし、親父様どふ有ても、樺松が敵、此子を存分、みなさる、
かくといへ、アせびもなし、此上、我名も、語子細を明した上の事と、若
君を、お筆、よいだかせ、上座、直し、權四郎頭、が高い、天地轟く、鳴雷の、こと
く、お姿、見す、共定て、音、も聞つらん、是こそ朝日將軍、義仲公の、公達、
駒若君、斯ナ我、櫛口次郎、兼光よと、いふ、親子、あら肝、とられ、鞠れ、果
たる計、なり、櫛口、お筆、打向ひ、抜き、女のかいへ、數跡、迄、先途を見
届る神妙さ、山吹、前も恩ひ寄ぬ、さいと、身が父の隼人も、あへなく
討死、たりとな、力落、し思ひやる夫、付てもかくて、有、櫛口が身の上、嚙

不審若君の爲より祖伯父ながら多田藏人行家といふ無道人を誅罰せよとの意を請河内國へ出陣の跡鎌倉勢を引受栗津の一戦誤なき身をやみくと生害遂給ひし我君のほさいごの懲罰すぐりにかけ入、一軍との存せしかど思へば重き主君の怨徳を以て範頼義經を討取亡君又手向奉らんと此家又入智し逆艦を云立早梶原又近付義經が乗船の船頭の松右衛門と事極る追付本意を遂る様又成み付此若君のほ在所の何國いかゞあらせ給ふと心ぐるしき折も折最前もの物語障子越え聞え付見れば見る程面やつれ給へ共紛ひもなき駒若君扱は思ひ儲家願はずして所こそ有日こそ有其夜一所泊合せ取かへられて助り給ふ若君はほ運つよく殺されし樋松は樋口が假の子と呼れほ身代え立たる二心なき某が忠臣の存念天の冥慮又相叶ひ血を分ぬ子が子と成て忠義を立し其嬉しさ何よ類の有べきぞ是も誰かげ親父様子な

らぬ我を子となされ、親ならぬ我を親とする樅松恩も有義理も有餘所
外の子と取違ての敵ならば、そこに、ほ堪忍かんにんあされふが女房めらわらうがよしと
テ共、其敵あんふんおんよ置べきか、親父様おやぢさまのほ歎あきら我わも不便びんさは身みよせまれ
其相人あいじんよ取れぬ主君しゆきんの若君弓矢取身ゆきのそくしんの上うへよへ願ねがふてもなきほ身み代祖がはりち
父ちち親おやぢの名なを上あがた樅松ひらまつ、其名なを上あがた元もとはと問たずべ、私わたしを子ことなされし親父様おやぢさま
のほ厚恩こうおん千尋せんぢゆうの海蘇命路うみそめじゆうの山夫さんぼさへほ恩おんよへ中なかくくらべがたけれ
ど、まだ其上あがよ大恩だいおん有あ主君しゆきんの若君わきのじん、孫まごの敵あだまき迎祖むか父ちち様さまよ切きりられうか、我手おてよ
かけて主殺しゆごろしの悪名あくめいが取れうか、花は三芳野人みよしのじんの武士士末世まつせよ殘のこる名な乞こ
そ耻はずかしけれ、ほ立腹りつぱの數すうほ歎あきらの段だん、ヤ上うへふ様ようになけれ共とも、親おやぢと成子なまこ
と成夫婦ふうふと成其縁えんよ、つながるよ定さだり事ことと思召おきめりて、若君わきのじんのほ先途せんとを見
届とどまだ此上あがよ私が武ぶ士道しどうを立たさせて下さられバ、生いきよ世よののほ厚恩こよおん聞分きぶん
てたゞ親父様おやぢさま、身みを謙詞けいしを崇忠義しゆちゆぎよ凝こたる韁口ひきぐちがふせふせい、兼平巴かねひらばが頭かしら

をふまへ木曾又仕へし四天王、其隨一の武士と世又名を取しも理なし、
權四郎はたゞ手を打て、そふじや侍を子又持べおれも侍、我子の主人は
おれが爲ふもほ主人、かく智殿ほ手上られい舟玉冥理再び丸額よ成て
炊食する報も有、恨も殘らぬ悔もせぬ泣泣もせぬ娘精出して早ふ又梶松
を産で見せおれ、扱ひほ得心參りしかば、添や嬉しやど互の心波どけ合、
千里の灘の漂舟湊見付しことみて悦びあふこそ道理なり、お筆嬉し
く若君を梶口の次郎よ手渡しし、そこ又かくておはすれば此お子の氣
遣なし、浮沈は世のならひ、私が妹此津の國よ勤奉公すると聞、夫が行衛
も尋だし大津で討れし親の敵討て亡者へ手向たし何やらかやら事じ
げき、私が身の上早ほ暇と立上れば、そふ聞いて留るも無調法、残念なが
ら我等の身分、力又ならふ共得ゆさぬほ勝手よお出なされ、智殿ハテもぎ
とふなせめて二三日足休め、夫よとゞ様のおつしやる通かふ心がとけ

合ば、初め何のかのとやた程けつゝ名殘有、ひらよと留てもとまらぬ氣、
涙なみだよくれど、若君を頼たのむまるしの頼のといふ中かいの、本意を遂とげて又ほ
出さらばくと門送り、見送る袂見返る袖お筆ふで別れ出て行、摺すりくく
武家もの育た女中の格別娘今からあれ見習へよ、こそや爰こゑみ七面倒な笈
摺すりが有、どこへ成ととつとし捨てしまへ、親父様夫は餘あまりあ思召切ききせめ
て佛前ぶつまへ直し香花も取逆さかさま様な事ながら、ほ回向まわなさつて取さつ志やれ
ま志さぢよ侍の親おやぢ成て未練みれんあと人ひとが笑ひはせまいか、何の誰だれが笑ひまし
よ、嬉うれしやく有やうりさつきよからそうしたかつた、娘納戸むすめの持佛もちぶつ
へ火ひをともせと、手てみ取上あがめるる笈摺すりの千年も生さふと思ふたよ、たつた三
つで南無あみだく阿彌陀佛、槐松聖靈頓生ぼたい、聾殿ろうでんござれ娘むすめもこいと、見れ
は見かれず顔おほと顔おほ俱ともみ涙なみだ、暮くねの鐘かねかうく、とこそ聞きへけれ早約束はやくの、
黄昏時たそがれ又六むろくを先さき立、富藏九郎作三人、連門口つれかどから用捨なく、松右殿内まつうでんないみ

か、約束の通參つたと高呼はえず、待て罷りますと身がるゝ拵へ飛で
出御太儀くはいつてたばこでも參らぬかいやく大事の急の役用、
一精出して跡でのたばこしつぼりと先やりませうぞや、ともかくも
と皆川岸より立て繋る手船の渡海作りともづなとき捨飛乗く、
松右殿舟で妻子を養あがら、耻しいがついよ逆船と云事へ、志らぬ筈
く、何事もおれ次第教てやる、サア九郎作と又六り、おも柁取柁の艤船を
立た、富藏是へお出なされ、おれがする様よ艤船を立た、コレ皆の衆、此様よ舳
から艤船へ向て船を立る、是を逆船といふはいのふ、惣じて陸の戦ひへ敵
も味方も馬上の勵かけんと思へばかけひかんと思へば引事も、自由げ
み見ゆれ共舟といふ物は又格別、しつての通沙よ連風よ誘れ船柏子立
て押時は、行事も早けれど、乘戻さんと思ふ時、おも柁とり柁の風波を
考へ、取柁つかの手の中舟をくるりと本のごとく、押廻して漕戻す、夫

へます沙引沙さひひ もぢかふて舟ふね も過有時あゆまち 八方ならくの憂めを見いど
しかりい妻子さいし も再び逢あわれぬじやあいかひかよもそふじや其憂めを見
まい爲の此逆艦さかうかん サア其艦かん の艦かん を押おたゞく、おつと心得やつ志し つし志し や
つ志し 三段計さんざんけい 潛せん 出すだ サアかふ舟ふね を潜せん 寄よせん て退の つくまくつたづく 戰たたかふ時謀はかりごと 乗の 乗の
らるゝか敵てき もあら手て が加くわはるかくわ 負軍まきぐん と見る時とき 舟押廻おさへまわ す迄まことに もなく
コレ逆艦さかうかん 押立おさへだて 同どう 富藏合とむらあ 點てん か合點あてん じやく やつしつし志し し志し やつし元もと の
所ところ へ漕こぎ 戻もど す透すき を窺うかが ひ富藏九郎作耀かくよう 追取おさとり 松右工門まつゆうこうもん か諸膝もろひざ あいで打倒うちを さ
んと右左うざ はつしと打うち 心得こころうべき たりを踊おど てへ陸はる へひらりと飛上とが れば三人
つゝいてかけ上あが り卑怯ひきや 也松右工門まつゆうこうもん 僧木曾そうきそ 郎等らうとう 楩口まつぐち 次郎じろう 兼光けんこう とい
ふ事こと 梶原殿かじらでん よくは存知ぞんち なされ逆艦さかうかん の稽古さかう も事寄よせ て 撮捕連からめどん 來れと我々
よ仰あお 付つけ られた尋常じんじょう 腕廻わくまわ すか打うち のめして繩ひも かけふか腕わく を廻まわ せと嘗のこつ た
り 楩口まつぐち からくく と打笑うちわらひ ひ推量すいりょう も違たが 上あが 何なん をか包いれる まん朝日將軍義仲あさひしゃうじゆよしぐん

の内みおいて、四天王の隨一と呼れたる櫛口の次郎兼光、僻等ふせん
が摑捕などい眞物付たる一番碇蟻の引みとあらず、ならば手柄よ揚て
見よ。玄やらくさい廣言跡でいへと櫛ふり上、なぐり立るを事共せ玄
かひくゝつて引たくり、先よ進し富藏が頭みぢんよ打碎けば、一人でい
叶ぬぞ二人かゝつて手よ餘らば、打殺せと立別れはつしと打さしつ
たりとひらく身よ櫛と櫛とい相打よ、互の眉間あいたしにためらふ隙
よつゝと入櫛引たくつて捨たりける、組で捕んとむり無三取付二人を
引寄く、力よ任せ名いうんと踏くだく天窓のさら微塵よ碎死てけり、
安からる若君の一大事何せん、我身をいかよとためらふ胸よひつ
ひとひかく鐘大鼓、數百人のおめく聲、こいいかよくと驚中よ心付、届
櫛の物見櫛でざんなれとかけ上る門の松、顔よべつたり蜘蛛の巣や松葉
の針てあひたしと目さす計よ暗からぬ玄げる梢の臘月、四方をきつと

見渡せば北の海老江長柄の地東の川崎天満村南は津村三つの濱西は源氏の陣所く、人ならぬ所もなく天のこがせる篝の光り、扱ひ樋口を渡すまじ取逃さじとの手くぱりよなさも有いかと飛でおり、女房共親父様くと呼立る、イエとし様は納戸のかべをこぼつて、どつちへやらいかしやんした、ナカベこぼつてうせたとは、ムよめた訴人ようせたな、財寶をむさぼつて訴人する、兼ての氣質でいなけれ共、樋松が怨を忘兼夫でうせたか、ア樋口程の武士が、舟玉の誓言と氣を奪はれ心を歎し、銅火と手をくはれた、口惜や無念やと、拳を握り歯をならし忘はれぬ眼と泣涙みがき立たる鏡の面水をそしぐがごとく也、お腹立て理りながら、とし様と限つてよもやそふでい有まいと、云あだむる折こそ有組の捕手の腰明り、武威輝す、高挑燈畠山の庄司重忠、權四郎と案内させて見へければ、娘の夫と見るとし様、怖いといはせもあへず、訴人の恨かいふ

な／＼おれが訴人せいでも松右衛門を樋口次郎とい梶原殿が能存
知なされて、富藏や九郎作よ、^{からめ}撈とらそふとなされたるやないか、夫計じ
やない四方八方取かこんで樋口が命の籠の鳥、何ぼ助けうと思ふても
助からぬ、おれが秩父様へ訴人したは樋松めが事で、ア其樋松の事をい
ふて松右衛門殿が腹立て、何の腹立る事が有、親子といふ名よ繫れて、孫
めが親と一所よあつち者よ成ふらふかと悲しさよ、おれの樋口が子で
はござりませぬ、死だ前の入智の、松右衛門が子で合點がいたか、ほんの
親子でござらぬからは、訴人致したかはり孫めが命、お助なされ下され
と願ふたれば、段々聞し召分られ、天下晴て孫めが命は、^ア慮外ながら、此
祖父が助けた、夫よ何玄や樋口が腹立た、^ア儕が子でもない主君でもな
い、若君でもない大事の、おれが孫を一所よ殺して侍が立か、若い其
大きな眼も、祖父がくなく心の數々見へまいぞ、怖いとぬかす儕等

が、けつく祖父は怖いと氣をせき上てくもり聲よふ訴人なされた有が
たし共過分共云ぬ詞はいふ百倍嬉し涙みくれけるが、すつと立て重忠
の傍近く天晴邊が梶原あらば太刀の目釘のつゝかん程切死又死ん
すれども栗津の軍妹巴が身の上迄志有しと聞重忠殿情又刃向人刃
はなし腹十文字又かき切て首を邊又參らすといはせも果す、又頬口、
死首を取て手柄とする重忠あらず、逆も叶はぬと覺悟あらば尋常又繩
かしられよ、いやく運盡て腹切は勇士のあらひ、繩かしれとは此繩
口よ生恥かせん結構な仁義有重忠の詞共覺す、これ極口木曾殿の
脇内よ四天王の隨一と呼れ、亡君の怨を報へん爲、權四郎が聟と成て弓
矢よ勝る櫓櫂を取て、大將の舟を覆し麿又せんす謀醜し頬もし、普
の豫讓は主の智伯が怨を報せんと、邊が如く姿を略敵襄子を狙ふ其
志を深くかんじ、着たる所の衣服を脱て豫讓又あたへ其衣を切せて

彼が忠義を立させしれ、敵ながらも裏子が情木曾殿叛逆ならざる事り、書置と顯はれにさいと今更悔よかいなし。主人と科なき樋口次郎全く恥をあたふるゝあらず、忠義武勇を惜給ふ、大將義經の心をさつし、重忠が繩かくるとつゝと寄て、樋口が肘捻あぐれべよつと笑ひ、關八州は隠れなき勇力の重忠殿、力づくよのふどらぬ樋口、取れし此腕もぎ放すは安けれど、智仁兼備の力よハ及びもない事、相手みなられず、ともかくも計はられよと弓手の腕を押廻せば、愚く忠義厚、樋口殿の力よ重忠が及んや、大手の大將範頼公、搦手の大將義經公、兩大將の仁政文武二つの力を以て警此繩ぞと、かくるもかしるも勇者と勇者、仁義よからむ高手小手繩付を引立させ、同女樋口殿の血こそ分ね、樋松とやらんの太切な子でないか、暇乞をと有けれど、およしは泣き納戸と夙たる子を抱上、コレのふ暫し假初も親子と云し此世の別れ、レ顔見せると指寄せば、同よ樋

松よ暇乞とい、四相を悟重忠の心情ちいの願を聞分繪ひ助かる。添
なさ、誰彼の情も忘ぬ、コレ梶松としと云す。暇乞、樋口く樋口さらばと
稚子の誰教ねど呼子鳥我の名残もおし鳥の番離る。うき思ひやらん
くとすがり付娘よ吼な、何ぼやらんくと商賣の舟歌で、留ても留ら
ぬ、悲じや、たとへ死でもぢごくへはやらん極樂へやるやせいの舟歌、
思ひ切てやつてのけう沙の満干み此子ができるとあ、孫が身の上案る
なぢいが預のんゑいくわれが代よ大事よ育てゑいよほんほんほ
本よ何たる因果ぞと正体もなくどふとふし涙よむせふ腰折松餘所の
千年はしらぬ共、我身よつらき有爲無常、老ハとより若ハ行世は倒の
逆船の松と朽ぬ其名を福島よ杖葉を、今よ殘しける

○第四

山遠ふして雲旅人の跡を埋爰も名よあふ香島の里西國の往還迎賤

が家居も賑へり、今日の天道大日如來未申の年は、一代の守本尊と錫杖
立家より立辻法印、きんじやうさんやさいはいさいへいと敬て
白伊勢又神明天照皇太神宮と申奉るべし、本地の大日如來は眞言又
かんあびりたていせいからかくのごとく唱奉れば、手の隙がありと
をらしやれ、山伏の内へ齋料乞は山伏の友喰と云う女房表と出、
やれこちの人、是は扱うかく來たれべつる内じや、きゑん直又錫杖を
ふり立く、今日の天道大日様も聞へませぬ、餘まりけふは設がなさみ
頤は未申の年、一代守るは大きな嘘、分際菩薩とくだい勢主の金持計を
守つて、我等が内より不動様の火焔の様な火がふり、福一まんどの名前、
下用櫃よりこくざう菩薩、米がないとせがまれ、天窓の皿八幡ほうぞ
う、われ鍋とぢ蓋の女夫が口を過難、何と千手觀世音文殊菩薩のち名
かつてちつと小錢を設ねば、中身代たりんく、たしむをなすなよ

ごちのかし敬て白としやべりける。ゴン法印殿、けふハ設が有たやら仇口
をきかしやるの草臥休めよ出端などこまそふと茶釜の下へ指くべる。
其日の煙もかつゝ暮を祈る術もなし世よりき事の多き中、お筆は
若君駒若殿を樋口次郎が手よ渡し妹千鳥よ廻り逢親の歎をねらはん
と、上福島よりああたこあたと尋詫、香島の里よ着よけり妹が身の上聞爲
よは幸の山伏殿、ちどほ免成ませと内よ入私は旅の者笠がお頼やたい。
そ能こそと女房爲業押やり薄くと一ふくこしめせと、詞の鹽よ指出せ
バ、しかつべらしく法印愚僧が笠の秘傳の投算或ひ失物走人、夢合せ夢
判じ相場の高下、相性墨色薪の雜書釜の鳴、犬の長鳴鶴の宵鳴鳥の行水
親父の夜あるき息子の看經する迄も、奇妙な見通し、錢次第とぞすしめ
ける。ティ私はたつた一人の兄弟を尋る者、つい廻り逢手がしりを笠て下
さりませ、ツ夫はよつ程むづかしいが、たんてきよ笠ませうとふろ敷な

さん木取出し、コレ信シムを取ませうぞ。ついべりがけする様ヨリ又アリ投スルた分でいい
かぬぞや、成程アリく、おまへの様な見通みどはし、お目メよかシるの仕合ハシマツと算木サンガ
投スルればアリ、よし、ナニ年はいくつじや、アリ十七八ナナハチでもござりませうか、成
程十七八ナナハチと見へる、こなたの弟様玄アキやの、いゑ、アキ妹、アキ成程算木の面おもて
女メイと見へる、何年程アリ逢スルしやれぬ五六年ゴジヤシも逢スルませぬ、成程五六年ゴジヤシも逢スルぬと
見へる、こなたの尋シテる心充アリりとこじや、アリ人の噂ウワサよアリ神崎カミザキ又アリ勸奉公アドバシヨウコウ、アリ勸
共とも見シテやしやれ、占タロウの面おもてよアリ籠カゴの中の鳥トリのとしと有アリバ、廓カルワの外スズキへ
一足ヒヅメよても踏フもならハぬと、古レトロい書物シブモノよアリるした上アゲル、勤アラガルの身カラの籠カゴの中
の鳥トリ、妹様アキの神崎カミザキ又アリ領城奉公リョウシヨウコウ、アリ疑ハダガひない、何ナニときつい見通みどはしかシテそりや
私が口カクうつしをふつしやる計カウジ、廓カルワの中ノミでもどこらハ居ルよアリ、方角カタカタさし
て下アッさりませ、アリめつそハうな、夫ハが見シテる程アリならば山伏ヤマツバにしませぬ、相場シヤウハウ
事ハシマツみかシるわいのアリ、アリ嘆カク、アリ宏カミやないか、此ハシマツ在ハシマツはづれをまつ直タマツ、アリ行ハシマツバ神

崎、逗留して尋さつ志やれ、ア夫なればせひも内義^{まじぎ}と包錢^{つみせ}たとへのふし
よ陰陽師^{おんようじ}と、辻風ふせぐ笠かたぶけ、お筆^ひにかしこへ急行^{いそぎゆき}、女房共此^こふ容
れどこへじや、ヤとつちへとの先も云すけさからむるす、コリヤ悪い病が付
たわい、錢なしの手傳業^{てんがう}、玄やの^一、そさういい玄やんな、神崎のお傾城梅
か枝様^{しそう}へ得意^{ごく}且那、其佳^{よし}で誰有ふ、梶原様の御惣領源太様^{あづか}を預^{あづか}り、米薪^{なき}み
そ鹽迄梅^{しじは}がえ様から仕送り、お歴^{れき}のああたがそんな事何のいの^{ノヤ}そ
うでない、贅^{あざ}へ乞たしちやん^{へな}し、惡氣^{わるぎ}の付まい物でもあいと噂半^{ほそまん}へ
立歸る、梶原源太景季^{かねすけ}勘當^{かんとう}の身の寄所、辻法印^{ひざな}とくまはれ見るかけも
なき素紙子^{すがみ}一点、門口から笠取てやれ^く、方^カかけあるき、存の外草颶^{くわ}
た法印^{ひざな}、嘸待^{まわ}たで有ふ、何の待ましよ、急な事で金がいる才覺頼^{さぬかくたのむ}ど、人^{はな}と計
世話^{せわ}やかせど、こよはいつてござました、されば^く、其才覺^{さぬかく}と身もある
いた、急用^{きゆうよ}が出来てきて梅か枝^{あらわ}、逢ねばならぬと云てから紙子の風^{ふう}

体此形でかいとふも行れぬ、ア此比迄召めしたお小袖や羽織はかへ、女房めのいふな夫の此法印が頼たのれて、七難即滅そくめつとまげて仕廻しめぐらた、おろせやりて又紙花の借錢しゃくせんなしなされたわい、おまへもいられぬ、贅あざはらずと傾城買かかり紙子か常跡じょうせきイヤそふでない今迄大夫おほひしゆが情あさみて、見苦くさしい尾おも見せず此形ではいかれぬ、あすへ共の延のされぬ其譯わけを聞きてたも義經公より一の谷の平家ひらけを攻めんと、明日未明みよ出陣立源太だいげんたも此度高名かうめいせでの父およ再び對面たいめんあらず發足はつそくと定めしが、彼產衣かのういの鎧兜梅よろひがぼが枝えよ預置夫あづけむすが波なしさよ右の譯わけ、玄あらたが思案しも有あべ有物あ、けざあ尼あが崎さき大物おほの浦うらをかけ廻まわり、大將義經公よ一の谷にへ出陣京都きょうとくる兵糧米馬ひょうりょうべいばの飼料かいりょう遅おなれバ、米麥大豆こめむぎだいとうの差別しやべつなく今日中よ香島かしまの里さと、辻法印つじほあいが方かたへ持參さんせよ、則武藏坊辨慶殿ぶざうぼうべんけい判居はりし證文しおとんを引ひかへ、軍終おはらバ、一倍增ふたまいぞうで返濟へんさいと百姓共ひんぞうをたらせしが、辨慶様べんけいさまのお目めよかしより其上うへで用もち立たと追付爰へへ皆みな來きる、爰へが氣き

の毒どく、何なにとぞ急いそみ辨慶べんけいを捺なへすば成なまい、指誥頬さしごのほの頭役法印辨慶べんけいよ成なて
たも、シやくたいもない辨慶べんけいの兵愚僧ひょうぐそうによる者もの、七尺ゆたかの大の法師
と、五尺ごくしよたらぬちつくり法印似にしかずても似付にづかぬお赦ゆるしなされ、ヤこれ足あしを
爪立つまれはば、四寸や五寸ごくしのくろめらるはし、其上そのうをまだ繼足つきあして高足駄こうじだで背
ハくろめる、辨慶べんけいが身みの所作しよさの仁王にんわの形かたちで玄くつて居りやよい、あれあれく向
ふむかへ百姓共隙ひなま取とてはきのどくどいやがる法印はいじんむりやりうりや連つれて一間いつまへ
入いみける、百姓共ひなまどやくとと蒲箒藁畚引かわらふなひきかたげ、何なにと太郎兵、彼かれお山さん
ハ是これかいのう、聞及きみふ辻法印爰わらわ玄くつやくと内うち入い、何かた様よう是これの内うち入い辨慶べんけい
様ようがござるはげな、大物おほの百姓共ひなまお馬うまの飼料くいりょう持もてきたと、と家來衆けらしゆよい
ふむて下くだされ、成程なるほど辨慶べんけい様ようもお待兼まことにどりや其通うつ上あんと立て行ゆ、景季
法印はいじんを辨慶べんけいと拝はい立た、一問いちもんを立出たしゆつ百姓共ひなま約束やくそくちがへす太義たいぎくと先程
も云い聞きす通源氏とうげんじの大將判官殿ほんぐわんの、と用もちよ立た汝等なが身みの大慶けい、軍終おはらば

一倍増^よえて返さるしは判頂戴するに有がたいか、ア有がたうへござれ
共、只證文^{しやうもん}より手形より、辨慶様^よおめ見へ致し、お直^のの詞^{ことば}下さるしが以
判よりも體^{たい}な、そりや百姓等^ねが願ひ^{まか}任せ、只今是へと反古張^{はうぐば}のあかり
障子^{しようじ}、さつとひらき立出る辻法印^{おさなこ}壓^{おさな}狀^{じょう}少くめの辨慶出立^{だい}肩から裾迄た
ばねのしの一枚^{まい}形^{がた}白あげ^{しらあげ}紺染^{こんざい}の大夜着^{よけ}、女房^{めのわらわ}がいつちよら帶引^{おびひき}で
いてとんぼう結^{むす}び、瘦^{やせ}たる頬^ほ又^{また}鍋炭塗^{なべたんぬ}所まだらの武藏坊^{むさしほう}長刀^{ながと}がなりの
金剛杖^{こんごうじょう}竹^{たけ}すのこを踏轟^{ふみどろか}木履^{はき}の繼足^{つき}凌競^{すさまじ}見られんとふんばたがつた
る其有様^{わざ}さら^ア強^よふり見へざりける源太^{げんた}の態^{たい}両手^{りょうし}をつき、大物^{おほもの}の百姓
共^{とも}おめ見へと披露^{ひろう}玄^{くわ}て、こりやく汝等^{なむじら}只^{ただ}今下^{しも}ふおすひりなさる、そこ
らあたりへ地響^{じきょう}せう心得^{おもかる}驚^{おどろく}くな、アはつと恐れ敬^{うやま}ひためつすがめつ、
見られて術^{じゆ}なき辻法印^{おさなこ}、見せ物^{みもの}も出た心地^{こころぢ}也、百姓^{ひやう}共口^{くち}よ^ア、何^{なん}と聞及^き
たより手先なども青玄^{あおぞら}らけ、ひがいすな生付^お背^せのきよいと高けれど、

からだ、又似合ぬ、おつむりがちいさい、ふり賣の飯蛸で天窓、身のない
辨慶様、あれでも兵様かいのと、目引袖引つぶやけ、扱へ、旦那のお顔の
やつれで、誠の辨慶様でないと思ふか、都から段と打つべく戦場のお勞、
殊々此間のお風をめしてお亥つらひ、氣むづかしさ、態物もおつ志や
れぬ、又病氣でなくば、旦那の力が見せたいな、見よあの右の肘、百
人力、左の肘、百人力、夫程力持者が辨慶様で有まいか、あられやれ米一
粒、惜まいといふて見よ、お腹が立と、物身の力がふつぶつ涌出千人で
も万人でも風、木の葉鬼、煎餅めりく、ひ亥やりこなみぢんと、強い
揃へを言立れば山伏も圖よ乗て、強ふ見せんと拳を握り臂を張力めば
額、黒汗ながれ、わんばくな手習ひ子が畫上り見るごとく也、百姓共の
頭をさげ、其様、お強い事を聞上はのぶ皆の衆、何と思はしやる、辨慶
様は極つた、迎の事の念晴し、今のを問て見さつ亥やれ、夫よ、私共が

在所の物知の咄々と辨慶様の書寫みござつて、ほ紋のせんぼうと聞まし
たが、見ればほ紋の束熨斗、どふした事と問かけられ源太もほうと行詰
り、何物ぞやわい僅な兵糧米をそち達み無心おつしやる風体、世又連
てりんぼうのほ紋もびんぼうよかいつたと眞顔みなつて取かくれば、
よお禁止や何ぼ力が強ふても、錢銀より楯づかれぬ、内證聞ておいとし
いとわら番蒲筍米俵めんくゝ持て出おらは白米一斗五升、大豆八升
麥稗小豆澑手で栗のつかみ取、源太は硯引寄手取早く證文認め書判し
つかと末の世又至りても、大物の浦みどりまりし武藏坊辨慶が、借證文
とひ是とかや、源太の名充み引合せ一札渡せば受取て畢竟是より及ば
ね共面の念の爲、軍終らべ一倍増をお忘れなされて下さるなほ暇ア
と打連立川中ではがれた尼が崎大物として立歸る、女房の走出、扱もひ
あいな欺様、中程からほくれがきてわざやあぶく思ふて居た、一向み

此法印は始終夢中でやり付たと、夜着を脱捨汗押拭ひ、仕課せたと思ふたればどつかりと氣草臥くたよれ、道理そんざいく、首尾能いたもそちが影源太おがの此ざこく物金のかはり又向ふへ東身の廻りを受戻し片時かたときもくるわへ急たし實じつより尤去ながら持もならぬ肩仕事かたし、凡是たゞでも一石餘りか一人でいいかぬく、時の用もちい法印も片はなを仕らん、若も是よて不足ならば辨慶が脱がらの夜着も次手ひまげませふと、藁畚蒲箒指荷わらべこかますひ、一足いてハ肩かたをかへ二足いてハ息いきをつき、香島の里さまと馬まの有あと、君を思へばかちはだし、人ひとの戀こひ共しらげのかね又浮身うきみをやつすぞ「世なりけり、爰こゝも名高き難波津なにわの戀こひの舟着數ふき」の多かる中なかよ取分わけて酒汲さけくみかはす神崎かんざきの里さとの色宿千年いろゆくぢゃんや、客きよたへ間まもなかりける、殊こと又今宵いまの公はれのお客きやくと書院座敷しおいんざしきのはき掃除亭主さうりていしゆが榜中居はかまが榜ひさへの紅くれないも、園いん又植うて隠れなき大名客おほきやくに入いと、表おもての方賑はいはしく人目ひとめを忍しのぶ旅乘物たびのりものは供廻りともだわもかるトトと

地より鼻付て主が答拜し、出を待や。乙がれしと追蹤輕薄切聲の、切戸口より直々昇込奥座敷、梅か枝様へ人走らせ夫ふ菓子たばこ盆釜を沸す音羽山、馳走ぶりとぞ見へよける、雪や雲や花ちる嵐、かへい男よ僞あくば、本の心で淡路島千鳥も今は此里へ、身をバ賣れてや。梅の名も梅か枝の突出み。名木ならぶ方もなく、ちとせが本又、入來り亭主立出、云々遅い遅い梅が枝様けふのお客ハ東國の去お大名初對面から身請の相談箱入の駿河小判すつしりとしたふ捌サク奥へと云ければ、東國とお玄やんす其客の年ばい廿計ででつくりと、色の黒い髭男かへ、けもない事く。夫で心が落付た、わたしも爰々待合せ逢ねばならぬ人が有、ふつと合点そこの我等が請込、禿衆で座敷をくろめん、お前のほ用ハ彼ふかまの源太様よ間の襖を引立てこそ入よける、此姉様ハなせ遅い杉を迎エやつたるよ早ふ來ハなされいで、心せかれや。玄んきと待々程なく姉お筆

千鳥又逢が嬉しさ又足もいそくやりてが案内梅が枝見るのふ待
兼た姉様さつき又道で逢し時、言たい事の數も人目を遠慮、そりや
姉も同じ事、何からかしらいふやらよふままで居てたもつた、お前も
は無事で嬉えい久々便りも聞ませぬが爺様もおまめよあろ、やつぱり
桂の里又お住なされてござるかへ、は持病のおこらぬかと問かけられ
てお筆の涙、まだども様の事忘らずか、おらぬかと氣づかひどうぞい
な、アども様のふ果なされたわいのふ、はつと計りよ梅が枝の玄バシ、
涙よくれけるが、思へばわざい不孝者、ども様の息才なままでござる
と思ふから、我身の戀み跡先忘れ未よ面倒見届けうと約束せしむ人が
不慮又勘當受給ふ、男の爲又此勤身の徒又親の事思ひなんだ罰があた
つて、命日忌日がいつじやしら玄らず又暮した不孝の罪、姉おこらへて
ども様のお位牌へ詫言をして下さんせとわつとさけべば、悔の道理

其上よまた悲しきい。お煩ひでも有る事か刃よからり果給ふ、其様子れ
自らが木曾殿よ宦飯初ならぬに主人のみだい若君諸共父の方よかく
まひしが桂の里よも居る事叶はず都を出て大津の泊追手の者が寐込
へ切込くらがり紛れ、うろたへて相宿の順禮の子と若君を取違た其鹿
相がほ運の強さ、先の子ハ殺され若君ハ慈なく慥な人よ渡せじが悲し
いハ母様其場でお果隼人様もあへなきさいご親の敵が討たさみそ
なたの行衛、玄るべの人よ聞て尋し此神崎廻り逢たハ兄弟の縁のふか
さ、女でこそ有ふず共、兄弟が心を合せ本望とげふ、姉が力よ成てたも頼
ハ妹計ぞと語るも聞も涙なるのふ姉様悲しい中よも敵を討が梅か枝
がども様への言譯、其ア敵ハ誰でござんすへ、聲が高い壁よ耳諸萬人
の入込色里敵よ渡てハ一大事と咄しの半ヘ亭主かけ出サア梅か枝早ふ
早ふ、お前の背尺金積で身請の相談座敷の金でまばゆいそこを不勤ム

なさるゝへどうした心底、せひよお供と手を取ばゞ、もうそこへ行と云
ふ聞分ない。コレ姉様今い何も咄されぬ、後ふ必來て下さんせ、成程く今
咄した事是非ふ今宵へ延されず、其用意して待て居や、後ふくと約束
かためお筆の旅宿へ立歸る。サア太夫様のお出の様子、お座敷へ注進とき
おひかしつて走行、調ほんよ何ぞやの此梅か枝が心も忘らず、身請く
と取持顔、いやらしい夫のそふと源太様幕方からお越なされと香嶋迄
冬やうたよなせ遅い事玄や迄、早ふ逢たや顔見たや逢ペどふしてかふ
してとたべこ引寄薰らする胸の思ひの日よ千度、夜ごとくよ通ひく
る梶原源太景季、心を盡せし身の廻り大盡小袖長羽織、波うろく頭巾紫
の色ふ引るゝ揚や町、千年が奥を覗へべ、おれを待のか疊算てうど能首
尾幸どすつと通れペ梅か枝へ、巨燧ふどんと身をそむけ、煙くらべんあ
さま山とそらさぬ顔でふくきせる、コレ歌所玄やない來たひいの、何が機

嫌^へみ入ぬやらめつきりと持せぶり、大^{だい}名^{めい}客^{きやく}の襟^{えり}み付^はは物^{もの}躰^{から}で名すか、我等^{われら}が様^{よう}な浪人^{なつひ}の饅^{まん}た衿^{えり}みにすかれまいと、すんと立^たを待^ましやんせ、座敷^{ざしき}計^{けい}を勧^{すす}める筈^{はず}で、けふ爰^{こゝ}へ貰^{うけら}れたり多^{おほ}で玄^{げん}らせて合點^{がてん}玄^{げん}やないかへ、色も懸^{こひ}も打^うこして心底^{こゑ}づくの二人が中^{なか}、口^{くち}舌^{した}所^しじやござんすまい、お前^{まへ}ど一^{ひと}たいかふ成^なたれ並^{そな}大抵^{だい}の事^{こと}かいな、わしもいふ事^{こと}たんと有^あど、袖^{そで}から袖^{そで}へ手^てを入^はる^はつと引寄^{ひよせ}り、引玄^{ひげん}めて、遲^{おそ}ふ來^{くわ}ながら其^{その}安忍^{あんにん}憎^{にく}い男^{おとこ}と目^めみる^みき、涙^{なみだ}ぞ懸^{こひ}のなら^はしなり、もふよいなきやんな疑^{うなづ}ひ晴^{はれ}た、扱^{あた}み云^{いふ}事^{こと}有^あ、今夜七^{しち}ツの出^{しゆ}渉^よみ父^おを初^{はじ}弟^{だい}の平次^{ひやくじ}景^{けい}高^{たか}一^{いち}の谷^やへ出^{しゆ}陣^{ぢん}某^{それがし}も能^の時^{とき}節^{せき}、軍勢^{ぐんせい}も紛^{まぎ}れ下^さる^は付^は、そなた^なも預^{あずけ}た産衣^{うぶき}の鎧^{よろひ}請^{うなが}取^{うなが}、來^{くわ}たわいの^いと、聞^きよはつと當^あ惑^わの、色^{いろ}目^め見^むて取^{うなが}景^{けい}季^{すゑ}、いやく氣^きづかひ仕^しやるな長^{なが}ふ別^{べつ}れる事^{こと}でもなし、せひ今度^{たび}の行^ゆねば、あらず、おとも兼^{あわ}て玄^{げん}る通^{とお}も、と某^{それがし}の頼^{たの}朝^{あさ}卿^{けい}の名^なぼし子^こ、夫^めをかうよ勘當^{かんとう}の詫^わせぬかと、父^おの思^{おも}へく世^{よの}の人口^{じんぐ}、此^こ

度平家と戰ひて分捕高名譽れを顯へし今難義を昔語悦んでたも梅
が枝と何心あく語るよぞ思ひ設し事ながら俄はつと胸いたみ其鎧
の事聞と心の苦しみシテ其鎧が何と志たわたしが方よりとふからぬ
ナムと源太も聞り狂氣のごとく身をもみあせり様子が有ふ子細を語
れと氣をいらてバソ其様も浮世の事も疎のが大名の懷子浪人の中苦
勞させまいと此神崎へ身を賣り突出しの其日お前を客の名充として
皆わたらしが身揚譬世も有人でも里の金もつまるもあらいまして勤
の身あれば金のなる木も有まいしはへる土も持まいしお主の勘當敵
る迄といつもの揚屋も呑込せ積りくし揚代三百兩の金のかなりも
其鎧もやつたわいな扱ひ其金がなければ鎧の源太が手も入ぬかとは
つと計よ當惑し暫詞もなかりしが元此鎧の頼朝卿も拜領家も身も
もかへざるを志なしたり殘念や今悔て返らずと胸押窓に刀を取れば

梅か枝あひて押とゞめこりやまあどふ狼狽てじや死いでも大事ない、
（今夜）の出陣を外れ一生埋木と成りのたれ死せんより、只今切腹そこ
放せ、其鎧さへ手み入べ、お前の望叶でないか、其金りどうして調
へるとほ不審も立ふ、そこがお前と談合づく奥の客み身を任せたらし
なべ、二百両や三百両の金の自由扱ふれ故身をけがすか、夫の難義み
やかへられぬ、ふびんの者の心やな、譬死でも忘れぬと涙ぐめば、女房
よ何の禮お前が爰にござつてい客をたらすみ心がおかれる、尤も後
よこふぞや首尾よふ仕やが氣をもんで持病の痞借錢のかなりよ瘍ふ
こらしてたもんなと別れてこそ歸りけれ跡見送りて梅か枝の暫し
涙ふくれけるが必氣遣あざるもな、わたしが心充の有といふたれ皆
うそ、お前の命が助たいばつかり玄やわいな、何の好もない奥の客が、三
百兩の金くれふぞ、今宵中よ調へねば鎧も戻らず、源太様の望も叶はず、

金あらたつた三百兩で、かへい男を殺すか、金がほしいな二八十六で、
み付られて、二九の十八で、つい其心四五の二十なら、一期に一度、わざや
帶とかぬ謂、あんぞやの人の心も忘らず面白さふようたひくつさる、あ
の歌を聞え付ても源太様おれそめやかたと馴染館なじのやかたを立退、君領城けいりゆきと成さがつても一度
客よ帶とかず、一日なりと夫婦ふうふよならふと思ひ思おもひれた女房めいぼうをふり捨すて
此度の軍は譽ほまれを取、勘當かんとうが赦ゆるされたいと思召男おほしめの心こころいふんな物ものじや、何
かよ付て女程思おもひ切のあい物ものない、男故おとこごとなら勤はりするも厭いやねど、まだど
の様な悲しいめを見よふも知しぬ、夫おとこも金故おとこごと、何なんをいふても三百兩の金が
ほしい、わしや帶解ばぬ、甘なら四五の、四五の甘あら、一期いきよ一度、わしや帶
とかぬ、かへらぬ昔むかし戀忍こひのぶ、ほんよ夫おとこよ、あの客殺きりして身譯みわけの金盜きんとうふ、いく
若仕損わいそんじ殺ころされていとよ様の敵かたきも討うたれす、どふせふあ、最早日本國はにほんこくよ
梅いのが枝えだが祈いのる神かみも佛ぶつもないかへアア、夫おとこよ、夫おとこ故おとこごとよ、石いしと成なたる女めも有あ、我

ハ賤しき流の身なれど一念の誰よふとらん巖となれる手水鉢、水結び
上口すゝぎ、伏拜みく人よ、玄らせじ聞せじとひ玄やく追取傳へ聞無
間の鐘をつけば、有得自在心の儘、是よりさよの中山へ遙の道へ隔れど
思ひ詰たる我念力、此手水鉢を鐘となぞらへ石よもせよ、かねよもせよ
心ざす所へ無間の鐘、此世へひるよせめられ未來永々無間墮獄の業を
うく共だんないく大事ない海川よ捨れる金、一つ所へ寄給へ無間の
鐘と觀念す面色忽紅梅の花れちりく心も髪も逆立上り、ひ玄やく持
手も身も震いれ既よ打んとふり上る二かいの障子の内とも其金爰よ
と三百兩ばかりくくと投出す深山ふろしよ山吹の花吹ちらすごとく
みて爰よ三兩かしこよ五両、是へ夢か現かや、どなたか玄らぬが此は恩
先でも忘れぬくと嬉しいやらこひいやら拾ひ集る心もそゞろぞで
引ちぎり三百両包よ餘る悦び涙鑑がはりの此金と押戴く、いざみい

さんで、走行、梶原源太景季首尾か不首尾の二筋を、只一筋、揚屋町奥は
さりぎの最中禿がな出よかしと奥の吉左右聞迄、暫し待間も千年屋
の首尾を窺ふ姉お筆、今宵の中兄弟一所よ敵討んと思ひ込、小づまりと
しく鉢巻、玄め梅が枝よ逢迄と、飛石傳ひ細路、次の間の切戸よ身をひそ
め、今や出ると待居たる走つまづき梅が枝、産衣の鎧を持せ、息を切て
かけ戻りかしこよどつかと鎧櫛、おろせばとつかれ立歸る、景季見る
飛立計、出かしたいかる働源太が武運よ盡ざるも弓矢神のほ加護と
押戴、出陣の刻限七つよは間も有まじ、是より直よ出陣めでたふ歸り對面
せふ、無事で勤めやさらばやと立を引とめ、奥の客の情よて金を調へ、鎧
を取と暇乞もそこく、せめて暫しが中なりとわしよたんのふさせた
がよい殊よ又おまへの耳へ入ねばならぬ事が有、ア下よ居て聞て下ん
せけふ久しぶりで姉様よお目よかしり、話を聞べとし様の大津みて、切

れてお果なされたといな、其敵討相談又姉様も見へる筈ど聞て源太も
はつと驚き、シテ其敵の名は何とく、其敵の仮名實名、わらひがいふて
聞さふとめつきり切戸引ばづしつゝと入姉お筆のふよい所へ姉様幸
あなたとお近付、妹だまりや、近付みならいでも名はよふ聞たそなたの
夫^お梅か枝、源太殿^お隙取たま、忌^{むら}とはどふ玄や、親隼人殿を討たる敵
の子みのそはれまい、そんありやとし様討たのり、う忘れた事梶原平三、
う景時様かへ、はつと計^{はかり}み詞^{ことば}もなし、其又父景時殿を親の敵といふ慥
な證跡言^{しおりごん}へ聞ふ、有共^{とも}く、木曾殿の^に臺若君^に供^すテ大津の宿^{しゆ}まで梶
原が討^{うた}せし、兄弟の者が父、鎌田隼人^{かまた}清次殿^{せいじ}驚くまい源太殿、おらぬ
顔^{おほ}へしらべし、後ぐらいさもしい、シテ妹縁切たといへど答^{こたへ}もないが
やくり、扱^あは互の戀^{こころ}よからまれ親を夫^お見かへるのか、よさふでいなけ
れ共、因果な縁を結び初、今さら何と成物と、かつばとふして泣^{なき}たる景

季もつゝ立上り、父を敵とねらふ汝等、其方から望まいでもこつちから
隙くれた、出くわしたを幸此場で返り討みすべきを見遁す。今迄の佳
女の業より討れぬ敵と觀念し尼法師もさまをかへ親隼人が跡弔と
詞尖^{とんばる}云放せば、お筆りくはつとせき上、身不^ふ肖^そなれ共鎌田が娘、腰抜^こ
思ふてか、但女童の刀で景時は切まいがの、チア切ぬか切るか撲^あめ梅見せふ
源太殿^い相手^{よひ}ならぬ^ぬおくれたかと詰寄^{つめよせ}打ならず鏑音七つの
鐘の胸^{むか}ささ^ひ響^き渡^{わた}れば、南無三寶早出陣の刻限と鎧提^{よろひつき}立上るをどこへ
く、我^わが付ねらふをこなた^よ志られた上からい、輒^{こす}ふ^い討^うれまじ、景
時のかなり^よ不足なれ共親子^ハ一脉^{たい}敵の片^{かた}われ一寸も動^{うご}かぬと詰寄
バ梅か枝も獨^{ひとり}姉一人の夫、あなたこなたを思ひやり、うろくと立た
る所^よ、いづくも共白羽^{しらは}の矢^や狙^{ねら}のつぼ^いお筆^ひが胸板^{むちいた}ばつしと當ればか
つばと伏^ふのふ悲^{かな}しきやとあひて立寄梅か枝が櫻^{さくら}の番^番を二の矢^やと射^あられ

はつと計驚ながら、兄弟互よ顔見合せ、姉様よ過ないか、をなたよけがは
なかつたか、是へと櫛取上見れば矢の根もなき二本の轡、何者の所爲ぞ
と奥を見入て立たる所み、其射人爰よと一間の障子さつとひらき、滋藤
の弓携へ玄づくと立出る、梶原平三景時が妻の延壽源太見る、
母人面目もなきに對面と疊よひれ伏うづくまる、母の我子よ目もかけ
ず、玄どやかよ座よ付、珍らしい千鳥以前に自分が召使の必、今ハ名もかれ
つて梅か枝といふ流の身、そなたよ此母が段々禮をいねばあらず、
そも鎌倉を立退てより傾城よ身を沈め、源太を育心ざしを聞より、嫁よ
勤めさせられずはるべと難波よ上りそあたを身請せん爲此揚屋へ
来て様子を開べ、折しも源太は勘當の託の綱よもと、一の谷へ出陣思ひ
も寄す産衣の鎧を揚錢のかいりよ取れ、既よ我子も腹を切べき、難義よ
成を身よ引受、世の雜談よ云ふらせし無間の鐘を撞て成共、源太が望む

叶たいと我身を捨て、いたはる心底、母の障子のあちらよて、残らず聞て居たひいの、我子と心を盡す、梅か枝、何と無間と沈められうひるの地獄へ落されふ、最前金を三百両やつたるも此延壽勘當の子とみつぐ金、母が面に合されず顔も名も包しが、心に残らず打明すと語りも、あへず泣居たる、扱ひ奥の、ふ客といふも奥様ふ前で有たかと、驚嚇を突退ふ筆ひ傍へつゝと寄夫程恩有梅か枝、何て矢を射さ玄やつた、察する所こなた衆親子か云合せ、返り討とする所存で射とめたと思ひ玄やうが算計して射られし兄弟が運の強さ、レ天道様が明らかなるよつて、非道の劍、身立ぬ、何と非道で有まいか、非道もせよ道もせよ、現在夫の景時殿を付狙ふ二人を、即座と射留し、自が手柄、夫への忠節武士の妻よ成た役、鍔をぬいて、算計射かけし梅か枝への恩がへし延壽が心底見られよと、胸押定げ二本の鍔突立んとする所を、源太かけ寄何故の

此自害と云手よすがり押どひむ何故といそちが可愛さ景時殿が大切
さのふお筆兄弟の衆、わらひが夫子を思ふ又付親を討れ無念又有ふ口
惜からふ、親のかへりよ景季を討ふとい尤去ながら鎌田殿を討たるり、
意趣切闘打の業でもなく木曾の落人山吹親子を連て退たひ鎌田又も
せよ、誰もせよ見付次第よ討取たるハ鎌倉殿への忠節番場忠太が手
よかけしハ景時殿へ又忠節草葉のかげの隼人殿よも恨共思すまじ爰
をよう聞分延壽が自害で敵討を濟一刻も早ふ源太を出陣さして下さ
れ、今度の軍よ手柄をして宇治川の恥辱を雪ねば最早一生景季へ勘當
の身で朽果る、夫が可愛不便よござる武士の夫よ連添ば義よよつて命
を捨る夫はまたも惜からふ子故よ此體一分ためしよためされても
命のちつ共惜ふないサとめず共死してくれと氣をもみ身をもみ聲を
上子のケ程よも思ふまいとかつぱとふして泣居たる景季ハ一心不亂

母の慈悲心肝こゝよろみ、我故に心を苦しむる不孝の罪つみの子こよ報むがひ此身このみの武運ぶうんよ盡果つくはせんと悔くやを聞きて梅が枝うめのえ、わたしが心こころも推量すりやうして下さりませかたさ、敵かたを討うなでい不孝ふこうと成な討うなバ夫婦ふうふの縁ゆゑ切きる所證しよせん此身このみを姉あねと夫めへ引分ひわけ死死ふと思おもひ定めきまつしと歎かなべ、お筆ひも涙なみだぐみ、今のお詞ことわを聞きよつけ父ちちの古主こしゆの鎌倉殿かまくらどの夫めよ背そむく木曾殿きそどののみだい若君わかわらわが縁ゆゑよてかくまひ、夫故めのゆゑよ討うなれ給たまふる古主こしゆの罰ば不忠ふちゆうさせしも自故じご殊ことよ番場ばんばが所爲しはざと有あバ親子おやこよ共ともよ敵かたでない道みちを立たて誠まことをつくす延壽様よしゆさまよ過よさせてよい物ものか此上これぢょうの願ねがひよる今迄こひその通り此妹このわよ不便びんぱん頼源太様らいげんたさま、聞き分わけてさへ下さるれバ、梅が枝うめのえ嫁あうれしやく、是これで夫めも安穩源太あんぜんげんたの望のぞみも叶かなふといふいふ一筋ひとすじあらず二筋ふたすじの此鎌夫かまくらめを狙ねふ兄弟きょうだいを此矢このやで射のとめ命いのちを助すく夫婦ふうふ中なかよふ添そび遂とがて、梶原かじはらの家いえを再よびかす此矢このやなれば、もうそかよい成ながたし、先祖せんそ鎌倉かまくらの權五郎ごんごんろう景政けいせいが家の紋のんの三さんつ大だいの字じよ定きまつまれ共とも今いまの二に筋すじの此鎌梶原かまくらかじはらが家の

定紋譽を世上顯らせど、義を立通す詞の張弓梶原が矢筈の紋。此時方
と玄られけり、源太の悦び早暇給へらんと、つゝ立上れば、夫と序時
も早ふ出陣の用意くと皆立寄て鎧體武運も開くる産衣の鎧直垂小
手脚當上帶引玄め梅か枝が結ぶいもせの忍びの緒兜打物夫とよ簾か
き負出立たる。こつがらゆゝ敷見へよける、名残惜げよ梅か枝も延壽様
のお詞で、夫婦のかためひたつた今、假此身へ別るゝ共我名の夫のかげ
身よ添出陣の供と筒よ生たる紅梅を、一枝手折簾よさせば、元來若武
者よわいあふ若木の梅が枝が互よ無事でと目で玄らせ、うなづく度よ
ちる梅の匂ひに袖よ残りける、通武者ぶり頬なやと母の悦び兩手を上
今度の軍よ花よ源太も我先かけんくと、かつ色見せて父の勘氣を赦
されい冥加盡なハ討死せよ、生て歸るハ不孝ぞと涙ながら教訓の慈愛
の詞添く我も平家と戦ふよ、花簾こそ能敵と多勢が中よ取込なハ太刀

真向よかざしの花の、ちりぐべつと追ちらし向ふ者を拜打、又廻りあ
はゞ車切くもでかくなれ十文字鶴翼飛行の秘術をつくし譽^{ほまれ}を取、其時
母のむ笑ひ顔見せうぞいさふれ早お暇^{ひま}と。いさみいさんでたつか弓、矢
筈の紋と景季が文武^{ぶんぶ}古今^{こきん}とかんぱしく花有實^{アハラ}有武士^{モロヒス}と語傳^{カナリツタ}へて其
名をば簾^{エビラ}の梅と末の代^{はす}と譽^{ほまれ}をながくといめけり

○ 第五

源平互^{ひがひ}攻戰^{さめだか}ふ生田^{いのた}の大手を打やぶらんと、梶原平三景時次男平次景
高無二無三^{むふむさん}と切て入敵^{でき}あまた切ちらし、太刀のほめきをさまさんと攻
口少引退^{すくひりぞ}き一息^{いき}ついて立たる所^とと後陣^{ごぢん}の方^{かた}と番場^{ばんば}の忠太^{ちゆうた}遜參^{じゆさん}とかけ
來り、搦^{なからめて}手^ての大將義經、平家の本陣須磨^{すま}の城^{しろ}を攻^{せめ}んと有て、鉄拐^{てつがい}が嶺^{みね}鴨^{よど}越^こ
一の谷^{さか}の逆落^{さか}し、手^てばしかき謀^{はかり}しらせすといひせも果^はす父景時^お、よく
之^をらせたり、軍^{ぐん}とばやき義經^よと高名^{かうめい}させて、一分立す今一度^{てき}敵陣^{てきぢん}へ。

切て入此大手を打破り義經よ鼻明せん、氣をたるますな者共やつと下
知の半へ、梶原が物見のさいさく敵陣をかけ戻り、只今平家の城中を窺
ふ所又梶原やらぬ遁さぬと戰の真最中、乃父子の外又梶原と名乗者の
候やふ志ん也と注進す、平次景高眉を讐敵ひそめてき又もせよ、味方みかた又もせよ、梶原
が名字を名乗むのるい、我と親子の外又まない筈はず鬼神きじんも恐るゝ梶原の苗氏ひなじを
盜敵ぬすみをおどさん爲なるべし、何又もせよ憎にくい仕方しきわ景高實否じうぶを糺さんと
かけ行を暫しばしととめ、梶原と名乗むのるい外ならず兄の源太と覺る也、宇治
川の耻を雪すべん爲やさしくも先がけせしなよし誰だれ又もせよ其圖そのず又乘て
此城郭じゆうくわくを打破らん續つづけや續つづけと逸參いつさん城中じゆうとして、生田いくたの森、梶原源太景季
平家の多勢と打合戦ひ、今を盛さかりの梅の大木小楯おだて又取ひがゆて扣れば平家の軍
兵菊池きくちの一黨遁とがのさじやらじと追取おつとり卷まきア物ものよしや我より合あぬ敵てきなれど
菊池きくちと聞きバ名ふめでし花又縁ゑん有草うそうと木の生田いくたの梅も簾まくらの花もちりか

かつて面白や、八騎を相手又早咲の梅も源太も咲がけ又勝色爰又赤開
紅飛鳥の飛梅秘術を盡しけふの軍の好文木と切て廻れば白梅變じて
紅梅の血汐流て敵も疼ぬやり梅又甲も打落されて大わらひの姿と成
て引な引じと春風又花をちらして「戦ける景季ハ事共せず百術千慮の
手を碎きけさ切たて割腰車切伏く塵恐れて寄付敵もあし汀の方々
四五十騎真砂を蹴立駆け来るすはや敵よと太刀取直し近付を能く見
れべ、父の平三景時也、源太は見るゝ大地又ひれ伏恐れ入たる風情也道
義づよき景時も久しぶりの我子の顔見るめの中又涙を浮めやをれ景
季波が所存も母延壽が物語みて聞たるが、武士の身又取てい忠孝の二
つ、何れ又愚へなけれ共尤重きハ君命、そこを辨へざるハ武士の若氣、勘
當志たるも汝が心を勵す爲の母の慈悲、合點がいたか景季、今こそ父が
實の子と手を取て引立物の具の塵打拂へば、扱ハ源太がは勘當に敵兒

とや、云々や及ぶ汝が今日此城中々踏とゞまり、平家の多勢を切靡菊池
が一黨討取たるゝ宇治川の先陣々勝たる高名、此勢々乗て落行平家を
討とゞめん、いざこい源太跡々續や者共と、親子主従いさみよいさみ汀
をさして退て行、梶原か二度のかけどり今此時とぞられける搦手の大
將軍九郎判官義經公、一の谷の大敵を逆落しの一戦々攻破り平家の一
門或い討れ或い四國々落行べ鎧の袖々かつ色見せ軍の勞を晴さんと
花々屯の名大將下知々靡ぬ草もなし、かゝる所へ畠山次郎重忠、梶口の
次郎を高手々禁ほ前間近く引居れば跡々續て梅が枝兄弟、權四郎若君
をかき抱道もす上る通、梶口殿をお助有様々お取なし、ちくぶ様のふ
情と鎧の袖々取付するを目もやらずほ前々向ひ仰々隨ひ梶口が罪
科法皇の名いぶん々達しひへば、主の爲々怨を報せんとはかる忠臣の
心、強罪科共云がたし去ながら、勇者々勇者の法々任せどもかうも、義經

が心の儘、又計ふべしとの院宣故重て召具しひと乍上ればさればこそ、
恐ながら法皇の歎慮我思ふ所怡ふがうを合たるごとし、今彼を罪科せ
べ、此後主君の爲よ怨を報せんと思ふ忠臣の道絶果、弓矢の道を失ふ道
理、口が命へ助べし早繩とけとの給へばのふ義經殿、いられぬ弓矢
の道を云立我を助兼て中よからぬと聞、梶原などが讒言又合鎌倉殿と
中違て、後悔べし志給ふなよつく分別せられよと死を顧み志義經打笑
へせ給ひ、天下の政と小姓を見るがごとし、梶原づれが讒言を開入、義經
と中違ふ鎌倉殿ならべ夫こそ日本弓矢の破滅助よといひの計の法皇
の院宣殊更義仲内甲と残されし謀反ならぬさいごの一通明らかにれ
ば汝よかゝる科へなし彌命助るぞ、殊よ汝が子ならぬ子の梶松十五才
成迄權四郎とやらん隨分勞守育よ、鎌倉表へ此義經が勳功又かへても
宜しく事を計ふべしと始番しちしづの詞未前又察る名將の恩義又繩

も打とけてふ筆兄弟、樋口が悦び、權四郎有がた涙。若君抱いそくと福
島さして立歸る、梶原平三景時、親子三人、番場忠太を引具し、後バせ又か
け付^同。こそ樋口が誠とかれしな、勇士ハ勇士の計ひよせよとの院宣、私
又繩を解れしハ鎌倉殿を踏付る玄かた、但ハ我身を勇者と高ぶつての
志わざか、大將顔をふるまふての志わざならば、此景時も侍大將なせ談^ト
合^ト。召れぬ、忠太よつて樋口次郎又繩かけよといへせも立す義經公大
きえ面色かはらせ給ひ、樋口を助誤ならば、義經が腹切迄のと、一度なら
ず二度ならず過言の振廻赦されずと太刀又は手をかけ給へば、景時も
膝立直し、ほ邊が首又景時が太刀の立ぬ物か^{ナシ}、拔れよ相手又あらんと
語寄れば、秩父の君を押かこふ、父の源太が押隔ちしづ殿は前のふ取な
しげふよや及ぶ大事を前又置ながら論ハ善惡共^ハ皆非也、景時を引立
られよ、承はるど無ニ無三つれて、ほ前を立よける、此体を見て平治景高

なまぬるい兄のさいばい、親父のかはりよ相手よ成サア義經殿と詰寄所を、劍口すかさず飛かり景高が衿かい攃引かついでどうと投付れば、是はヒ立寄番場忠太首筋攃で動さず、兄弟父隼人を討たるへこいつと聞、親の敵今討と力よ任せ打付けられ、兄弟嬉しさ飛立計親の敵覺たかくとおこしも立ず、寸々み切たかでかしたく、こいつれおれがさいなまんと胴骨踏へて首ふつしと捨切、鎌倉殿の寵臣梶原が悴を我手よかけ、生害とぐる上からい我を助賜ひし、義經のほ身よ後難もなく誰誰よなんきもかしらず、かへすト、血を分ぬ悴が事、義經公重忠のほ憐愍頼奉ると、云々早く太刀取直し、我と我首ゑい／＼とかき落す忠義のさいごぞいさぎよき各勇士の心をかんじ諸卒を従へに凱陣、平家の大敵悉く八島の外へ切靡けめでたき春よ咲榮へ、勝色見する簾の梅源氏の益逆艦の松榮ハ千年の若綠竹の齡ハ万々歳神と君との道直よ治る

後代こそめでたけれ

元文四己未歳四月十一日

平假名盛衰記

卷

平假名

明治二十四年六月十日印刷
明治二十四年六月一日出版

發編行輯者兼
內藤加我

日本橋區通四丁目四番地

日本橋新和泉町壹番地

印刷者
瀧川三代太郎

發兌
金櫻堂

日本橋區通四丁目四番地